

NO.78 2005

東海体育学会会報

学会ホームページ用会報

発行会報と内容は同じですが、一部住所・所属等を削除して掲載しています。

なお、ホームページ用に編集したため、発行会報とは若干体裁が異なります。

ご了承ください。

東海体育学会

T466-8673 名古屋市昭和区山王町10 南山大学体育学教習所
TEL.052-832-3110(603) FAX.052-832-3703

[E-470-2] <http://www.soc.nii.ac.jp/tape/> 学会事務局 [E-Mail] tape@soc.nagoya-u.ac.jp

研究・教育と「自己責任」

東海体育学会会長 寺田 邦 昭

今年の名古屋地方、随分賑やかになりそうです。愛・地球博の開会に合わせ、セントレアの開港や、リニモ、ミュースカイの開通、そして、セントレアライン、伊勢湾岸道、東海環状道などが次々と開通しました。この万国博覧会の開催期間中、日本各地はもとより、世界からも多くのお客様を迎えることになるでしょう。

ところで、この万国博、弁当の会場への持込禁止が物議を醸しましたが、ここでの争点は、既にご存知の様に、持込弁当によって食中毒が発生した場合の責任の所在に関する協会側と入場者側との見解の相違でした。持込解禁派は、食中毒は「自己責任」に帰する問題としたのに対し、協会側は、本音はともかく一步も譲らぬ構えでしたが、3月末、規制緩和の総帥小泉首相の鶴の一声で、持込み制限が緩和され、一件落着となりました。

最近の流行語「自己責任」とは、自己や組織などが自らの判断で行った行為に対して負うべき結果責任であり、平たく言えば、自分で蒔いた種は自分で刈り取れということです。崩壊寸前の年金制度を支える確定拠出年金制度や、4月から完全実施になったペイオフなどによって、この「自己責任」が脚光を浴びるに至りました。

従来日本は、規制大国ともいわれる様に、社会主義国ほどではないものの、お上の定める規制が極めて多く、それらの規制を交通信号の様に遵守している限り、安全も保障されるという考え方が国民の中に定着し、事故発生時には、その責任を、自己よりもお上や管理者側に転嫁する風潮が見られます。

私もその一人であった様です。というのは、以前、欧州でスキーを楽しんだことがあります。ザンクト・アントンでは、人影のない夕闇の山頂駅から、街の灯りを頼りの心細い滑降を、またシャモニーでは、コース脇の生々しい雪崩の痕に怯えつつのスキーを経験しました。その折、こんな危険なところを滑らせるとはと、そ

のコースに入り込んだ自分の判断の甘さを棚に上げ、管理の杜撰さを疑問視したことがありました。しかし、これらの国々では、規制が少なく自由である分、「自己責任」の行動理念が国民に浸透しているのでしょうか。つい先日も、パリ郊外のブローニュの森の一角にある子供遊園地を訪ねた折、高さ10mを越す巨大なジャングルジムに子供達が鈴なりになっているのに驚かされましたが、下が砂場になっているとはいえ、日本ではとても認可されそうにない代物でした。事実、日本人の子供がこの遊具で怪我をしたとの話を耳にしましたが、こちらでは幼少時から、安全に対する自己管理・自己責任についての学習をさせているのかもしれませんが。

これが日本ではどうでしょう。凸凹道を自転車で走行、転倒すれば整備不良を放置した行政の責任、子供が溜池で溺れれば、柵や立ち入り禁止の立札がなかったとしてマスコミや保護者、近隣住民が挙って、管理者の責任を厳しく責め立てます。学校事故についても然り、教員の指導ミスとして、設置者である県や市に賠償を求めるケースが鰻のぼりの昨今です。それに伴い、被告になるのを恐れた教師側の自主規制で、腕白少年の晴舞台であった運動会の騎馬戦や棒倒し、ピラミッドなど危険度の高い種目が姿を消し、危険を予知・回避・対処する能力など、命を守るために不可欠な安全能力や判断力を培う場が急速に失われつつあります。規制社会の影の部分なののでしょうか。

それはともかく、この様な規制大国日本の中にあって、唯一、大学教員に対しては、さほど規制は強くありませんでした。研究テーマや方法、研究時間に対する規制はなく、教育内容に関する指導要領もありません。それは、大学人が、己の研究や教育の成果については自らの責任で達成するという「自由と自己責任」のルールを確立していたからに他なりません。しかし、近年になって事情は一変しました。文部科学省は、大学に民間の経営手法や競争原理の導入を

図り、これによって各大学は、少子化社会の中で生残りをかけた厳しい競争を強いられることになりました。また、教員の研究や教育に関しても、成果主義の風潮が台頭し、「自己責任」にかかわる部分についての評価が厳しさを増してきました。

現在のところ、多くの大学で実施されているファカルティー・デベロップメント(FD)は、教育課程の開発・向上(CD)や、教育目的を達成するための組織力の向上(OD)を主眼とした活動が中心ですが、やがてそれは、教員個人の、研究能力の向上(PD)や教育能力の向上(ID)に対する活動に、厳しい評価の眼が向けられること必定です。平成16年度から義

務化されたア kredィテーションにより、全ての大学は、認証評価機関の詳細に亘る外部評価を定期的に受け、その結果を公表せねばならなくなりましたが、教員個人の研究力・教育力は、大学にとっての要であり、評価の如何によっては、「自己責任」が厳しく問われることにもなりかねません。

東海体育学会では、研究領域ごとに研究会や情報交換、或いは共同研究等を行うべく、13分野に亘っての研究交流委員会を組織しています。大学人であるか否かを問わず、会員の皆様方が、PDやID活動を進められる場のひとつとして、これらの組織をご活用戴けたらと願っています。

【委員会報告】

企画委員会活動報告

企画委員会委員長 梅 村 義 久

平成16年度の企画委員会は第51回東海体育学会総会で承認された活動方針に基づいて、下記の事業を展開しました。ご協力をいただきました関係者の皆様に深く御礼申し上げます。

1. 東海体育学研究セミナーの開催

日時：2004年6月26日(土)

15時～17時

場所：中京大学名古屋キャンパス

センタービル7階 702教室

テーマ：「健康づくりの運動を科学する」司会：斉藤満氏(豊田工業大学)

講演1。「健康日本21に基づく運動プログラムとその実践方法」演者：種田行男氏(中京大)

講演2。「エクササイズのエノベーション」講師：高橋義雄氏(名大)

実技紹介 「ピラティス&ヨガ」 講師：石川英明氏(株式会社 ティップネス)

2. 研究交流委員会の開催

日時：2004年6月26日(土)

13時30分～14時30分

場所：中京大学名古屋キャンパス

センタービル7階 7C教室

3. 分野別研究交流委員会主催の講演会などの後援

①体育史・スポーツ人類学、体育社会学、体育経営管理分野主催の講演会

日時：2004年5月18日(火)

18時～20時

場所：名古屋大学総合保健体育科学センター 2階会議室

テーマ：欧州サッカークラブの経営史

講師：ムーアハウス氏(英国グラスゴー大)

②バイオメカニクス分野主催の講演会

日時：2004年12月11日(土)

14時～15時

場所：中京大学八事(やごと)キャンパス
センタービル0620教室

テーマ：北米トレーナー教育の現状と課題：バイオメカニクス教育に求められるもの

講師：矢内利政氏(中京大)

③体育経営管理分野共催の基調講演とシンポジウムの後援

基調講演

日時：2005年3月26日(土)

13 時～14 時 30 分

場所：南山大学名古屋キャンパス

D棟DB1 教室

テーマ：勝つためのチームづくり

講師：平尾誠二（株式会社 神戸製鋼所）

シンポジウム

日時：2005 年 3 月 27 日（日）

13 時 30 分～16 時

場所：南山大学名古屋キャンパスD棟DB

1 教室

テーマおよび講師：

～競技力向上を目指すスポーツ集団の
マネジメントを考える～

「トップスポーツチームを率いる立場から」

鳥羽 賢二氏(サントリーサンパーズ)

「学校教育の現場から」

牧野 章弘氏（豊橋市立章南中）

「研究者の立場から」

築瀬 歩氏（愛知産業大）

4. 東海体育学会学術奨励賞候補者選考

学術奨励賞選考委員会に委員を派遣し、東海体育学会第 52 回大会において学術奨励賞候補者を選考した。

5. 研究交流委員会活動報告

体育史・スポーツ人類学分野の活動報告及と
来年度の活動計画

報告者：吉田文久（名古屋短期大学）

秦 真人（愛知学泉短期大学）

田原淳子（中京女子大学）

來田享子（中京大学）

今年度は、東海地区の体育・スポーツ史をまとめる（データベース化）ということを活動課題として、会員による共同作業に取り組む計画で臨んだ。第1回（4/24）例会は木村吉次先生（中京大学）に東海地方の体育・スポーツ史研究のこれまでの成果・蓄積についてレクチャーをしていただき、今後の課題を確認し、共同研究の方向性について貴重な示唆を与えていただいた。その後、東海体育学会 60 周年記念史の作業母体として本交流会に協力要請があり、それについて会としてどのようなスタンスでかわれるのか第2回（5/29）例会で検討した。せ

っかく木村先生のレクチャーで学んでいながら、それ以降当初予定した3回の資料収集作業は、会員（世話人）の校務他都合のため集まりを持つことができなかった。そして、ようやく2005年3月に3回目の例会を開催することとなった。そこでは、秦真人（愛知学泉短大）先生から、計画を立てた東海地区の体育・スポーツ史をまとめる作業と60周年記念史をどのようにリンクさせるかについて提案をしていただき、それをもとに協議をした。そこでは、計画倒れに終わった共同作業について総括をし、その反省にたって2005年度の交流会の活動は、記念史編纂にかかわる作業を会の一活動に位置づけつつ、共同作業はもう少し先の取り組みとし、交流会（例会）の中心的活動を従前の研究（情報）交流とすることにした。また、他の研究組織の取り組みにも積極的にかかわっていくことを確認した。

2005 年度の活動計画（上半期の予定）は以下のとおりである。

5 月 14 日（土）

JOA 東海支部企画（13:00-15:00）

講演テーマ：「1988年名古屋オリンピック
大会招致を振り返る ―今後のオリンピック・ムーブメントに向けて―」

講師：藤瀬 兼男氏（元中京大学教授）

場所：中京大学 名古屋キャンパス11号館4
階 第1会議室

6 月 4 日（土）

例会 研究報告（2本：会員に募集）
（14:00-17:00）

7 月 2 日（土）

日本スポーツとジェンダー研究会企画
（13:00-15:00）

講演テーマ：「身体史からスポーツを考える
―性差はどのように語られてきたか―」（仮題）

講師：荻野美穂氏（大阪大学大学院助教授）

パネルディスカッション（15:20-18:00）

テーマ：「スポーツにおける多様な身体 ―個の尊重を求めて―」

9 月 未定（土）

例会 研究報告（2本：会員に募集）
（14:00-17:00）

10 月 9 -10 日

スポーツ史学会（名古屋：ルブラン王山）
10月30日（土）
東海体育学会（愛知大学 車道校舎）

運動生理学分野の活動報告

報告者：石田浩司
（名古屋大学総合保健体育科学センター）

運動生理学分野では、2003年度は華々しく東海地区で全国規模の学会を2つ（運動生理学会、体力医学会）も開催し、成功裏に終えたこと報告致しましたが、2004年度の活動は・・・例年のごとく、主だった活動をしておりません。ひとえに世話人の怠慢と毎年のように反省しております（同じことを昨年も一昨年も書きました・・・）。「共同研究の推進」というのがかねてからの目標ですが、それが遅々として進まない原因の一つに、会員情報が得られないことが挙げられます。毎年、この場でメールアドレスの登録をお願いしていますが、なかなか集まりません。また、2004年度に東海体育学会で独自の会員名簿を作るために、ハガキによる会員情報の調査を行いました。会員からの返信が芳しくないようです。さらに会員の個人情報をどこまで名簿に載せるかという問題も持ち上がり、名簿作成が遅れているのが現状です。個人情報保護法などの関係で、今後、ますます名簿公開が難しくなるかもしれませんが、できるだけ会員相互で連絡が取れるような体制を構築したいと思います。勿論、集めた情報は各個人に許可を得てから使用するなど、個人情報の保護に努めます。ご協力よろしくお願い致します。

我々の研究室では豊橋科学技術大、愛知教育大、豊田工業大、名古屋市立大などと実験器具の借り貸しを行なっていて、機器が故障した時など非常に助かっています。また、2004年7月には中京大学の運動生理学研究室と合同セミナーを開催しました。さらに、三重大とのセミナーも計画されています。このような地域内での研究の輪をどんどん広げていけたらと思います。何かご意見やご希望がありましたら、石田までご連絡下さい。また、メールアドレスをまだ登録されていない方も、石田までご連絡下さい。よろしくお願い致します。

バイオメカニクス分野の活動報告

報告者：合屋十四秋（愛知教育大学）

今年度の講演会のタイトルと用紙は以下の通りでした。

「研究交流委員会バイオメカニクス分野研究会のお知らせ」

いつ：04年12月11日（土）14：00～15：30
どこで：中京大学八事（やごと）キャンパス センタービル 0620 教室

名古屋市営地下鉄鶴舞線または環状線
八事駅下車1分

だれが：中京大学生命システム工学部身体システム工学科

教授矢内利政（やないとしまさ）氏

なにを：「北米トレーナー教育の現状と課題：バイオメカニクス教育に求められるものの」

氏のプロフィール

1964年12月 兵庫県神戸市生まれ。1987年中京大学体育学部体育学科卒業後渡米。1991年米国インディアナ大学(Indiana University)修士課程卒業(Master of Science)、同年米国アスレチック・トレーナーズ協会(National Athletic Trainer's Association)公認トレーナーに認定される。1996年米国アイオワ大学(University of Iowa)大学院博士課程卒業(Doctor of Philosophy)。1997年ニュージーランド国立オタゴ大学就任、学部生へのバイオメカニクス講義と大学院生への研究指導を担当。2001年同大学終身在職権獲得。2004年中京大学生命システム工学部教授。現在に至る。

研究テーマ：

- ・スポーツにおける運動メカニズムの力学的解明
- ・水中動作分析のための画像解析の基礎技術開発

肩関節慢性傷害のメカニズムの解明

講演の要旨は以下のようまとめて頂きました。興味のある方は次のアドレスにコンタクトをとって下さい。

tyanai@life.chukyo-u.ac.jp

日本において「トレーナー」という名称は、パーソナルトレーナー、アスレチックトレーナ

一、ストレングストレーナー等、様々な業種を総称しているが、アメリカ・カナダでは、Athletic Trainer（アメリカ）や Athletic Therapist（カナダ）というスポーツ選手に起こる筋骨格系を主とする外傷・障害の予防・救急処置・治療・リハビリテーション等を担当する準医療従事者を「トレーナー」と呼んでいる。この専門職を行う資格を得るためには、統括団体から認定を受けた大学の専門学科を卒業し、筆記(Written exam)と実地(Practical exam)からなる資格認定試験に合格しなければならない。2003 年度のアメリカにおける資格試験の合格率が 50%前後であり、特に筆記試験(Written exam)の合格率が低く 44%(5720 名受験 2545 名合格)であったことをふまえると、大学における教育内容の充実と・学生の日ごろの努力が如何に大切であるかがうかがえる。認定学科における教育内容の充実は、トレーナー関連分野にとどまらず、基礎運動科学や健康科学にわたって必要とされるものである。バイオメカニクス教育においても例外ではない。本講演では、北米トレーナー教育システムと米国バイオメカニクス・アカデミー作成のバイオメカニクス教育ガイドラインを紹介し、これからのバイオメカニクス教育に求められるものを考察する。

当日の参加者は、教官、大学院生、学生、等を含めて 16 名でしたが、活発な質疑と応答が行われました。このような内容はもっと多くの会員の方々にも是非聞いて頂きたいと感じたのは我々だけではありませんでした。次年度も、斬新なアイデアと切り口で講演して頂ける方の自薦、他薦を期待しておりますので、よろしくお願いします。

世話人：合屋 十四秋、木越 清信（愛教大）
吉田 和人（静岡大）湯 海鵬（県立大）

発育発達・測定評価分野の活動報告

報告者：藤井勝紀（愛知工業大学）

平成 16 年度の分科会としての活動は、例年のような分科会の研修会は開催しませんでした。しかしながら、平成 17 年 3 月に東京大学で開催された日本発育発達・測定評価合同学会に東海発育発達・測定評価分科会の先生方が参加し、発表されたので、その概要について以下に示し

ます。

平成 16 年度日本発育発達・測定評価合同学会
in Komaba. 2005

大会会長 小林 寛 道

1。期日・日程：平成 17 年 3 月 26 日（土）、
27 日（日）

2。場所：東京大学駒場キャンパス数理科学研究棟

<ホームページ>

<http://idaten.c.u-tokyo.ac.jp/godo>

以上の日程、場所で開催されました。東海分科会の先生方の発表は以下の通りです。

3 月 26 日、土曜日

<一般発表>

○ 穂丸武臣、野中壽子（名古屋市立大学）、藤井勝紀（愛知工業大学）、春日晃章（岐阜聖徳学園大学）、村瀬智彦（愛知大学）、酒井俊郎（浜松学院大学）

「幼児の運動能力発達に及ぼす生活行動・遊び環境の影響」

○ 斎藤由美（名古屋造形芸術大学）、藤井勝紀（愛知工業大学）、酒井俊郎（浜松学院大学）、花井忠征（岐阜聖徳学園大学）

「Rohrer 指数の加齢変化と初経年齢に関する発育学的検証」

○ 村瀬智彦（愛知大学）、春日晃章（岐阜聖徳学園大学）

「幼児の体力・運動能力データ収集における（説明と同意）に関して一保護者が同意する際に重視する内容は何か」

○ 石垣享（愛知県立芸術大学）

「痩身美と健康の基準を満たす体格」

3 月 27 日、日曜日

<シンポジウム>

テーマ：「子どもの体力・運動能力データ収集の手続きを考える」

○ 春日晃章（岐阜聖徳学園大学）

「アメリカにおける体力・運動能力データ収集に必要な手続きと現状」

○ 村瀬智彦（愛知大学）

「体力・運動能力データ収集における説明と同意の手続きにおける留意点」

<一般発表>

○ 藤井勝紀（愛知工業大学）

「男子における成熟度別運動能力発達の検証」

○ 野中壽子（名古屋市立大学）

「股・膝関節の相互可動域の加齢変化」

以上のように、分科会としての活動もかなり定着してきたように思います。これからも東海体育学会発展のために微力ではありますが分科会として貢献させていただきます。

体育方法学分野の活動報告

報告者：梅垣浩二（舞鶴高専）

昨年度も、その前年度と同様、研究交流委員会・体育方法学分野では何ら活動を催すことができませんでした。しかし体育方法専門分科会の月例研究発表会（地方会）が、中京大学の滝弘之先生を世話人代表として、平成16年2月22日（日）に、中京大学名古屋キャンパスで開催されました。テーマは、「アテネオリンピック メダリスト養成最前線」でした。滝弘之先生（中京大学）と合屋十四秋先生（愛知教育大学）を司会として、演者は、陸上競技の室伏重信先生（中京大学）、器械体操の加納実先生（順天堂大学）、レスリングの杉山三郎先生（中京女子大学）でした。アテネオリンピックを前に、各競技においてメダル獲得が有望視されている選手を預かる3名の指導者の方が、メダル獲得に向けての強化策や、トップアスリートの育成・指導方法を語られたようである。

保健分野の活動報告

報告者：石垣 享（愛知県立芸術大学）

平成16年度の保健分野の活動は、運動生理学、発育発達および測定評価分野に属している先生方と委員会を重複した形での交流がありました。しかし、保健分野のみでの研究交流活動は、何もありません。ただし、私自身が学校保健学会等の保健分野の学会に属しているわけで

は無いので、専門分野内での交流は他の場所になされている可能性も十分に考えられます。よって、保健分野を専門に研究されている先生を世話人とされれば、交流活動が促進されるものと思われます。また昨今の状況として、東海体育学会に所属されている先生方の研究分野も多岐に亘っており、保健という分野が独立して存続するには難しい状況にあると思われます。今後可能であるなら、他分野の先生方から保健というキーワードに対して何らかの提言があれば、それを基にして交流が進むのではないかと思います。研究交流活動の方向性に関しては、東海体育学会のホームページ上で意見をいただければ、それを参考にして話を進めることが可能ではないでしょうか。平成17年度は、発育発達および測定評価分野の先生方のご協力を得て、脚アライメントと運動経験との関係についての調査を実施する予定であります。

体育科教育学分野の活動報告

報告者：森勇示（愛知教育大学）

体育科教育分野では定例で毎月第4火曜を中心に体育科教育に関して報告・研修会を開催している。2004年度は「大学体育実践の在り方」をテーマに参加者からのレポートをもとに検討が行われました。内容は

- ・大学体育では何を学ぶのか試案
- ・ウォーキングの実践事例
- ・サッカーの実践事例
- ・スポーツリテラシーについて
- ・愛知県立大「体育科教育」講義事例

などのテーマで提案されました。参加者が少人数ですが、内容のボリュームはたくさんあります。会場が愛知教育大と愛知県立大で交互にもち、夜7：00から行っていますので、参加者をこの場を借りて募集いたします。

編集委員会活動報告

編集委員会委員長 大 桑 哲 男

1. 「東海保健体育科学（第 26 巻）を平成 16 年 12 月 15 日に発刊致しました。
2. 掲載内容は総説 1 編、原著 2 編（1 編は学術奨励賞論文）、事例報告 1 編、資料 1 編、特別講演 1 編であった。
3. 学会開催時に「東海体育学会学術奨励賞」の選考委員会（企画委員会から推薦された委員と編集委員会委員から構成）を開催し、平成 16 年度の東海体育学会学術奨励賞受賞候補者を選考し、理事会に推薦した。
4. 平成 16 年度から、「理事会報告」と「総会報告」を「東海保健体育科学」に掲載することになった。
5. 投稿しやすく、投稿から発刊までの迅速化、編集業務に関わる費用節約のための電子メールを用いての投稿と、一般投稿をいかに増やすかの検討している。

学会誌「東海保健体育科学」は独立学会としての発行誌であり、日本体育学会・東海支部学会の発行誌ではありません。現在第 27 巻の発刊

に向けて会員からの投稿を受け付けております。より一層のレベル向上を図り、これまで以上に学会員の業績の貢献に役立つ学会誌になるように努力しております。日ごろ、会員の皆様が取り組まれております研究成果をまとめ、「東海保健体育科学」に投稿して頂くことを強く望んでおります。投稿規程に従い下記まで投稿されることをお願い致します。

論文提出および問い合わせ先：

466-8555

名古屋市昭和区御器所町

名古屋工業大学大学院情報工学専攻（しくみ領域）

「東海保健体育科学」編集委員会

委員長 大桑哲男

Tel & Fax: 052-735-5199

e-mail: ohkuwa.tetsuo@nitech.ac.jp

広報委員会活動報告

広報委員会委員長 花 井 忠 征

平成 16 年度の広報委員会の活動は、会報の発行と電子化による公開、及びホームページの管理運営を行った。

会報は、平成 16 年 4 月に 77 号を発行した。発行にあたっては、ミニミニより印刷費の援助をいただいた。また、会報の電子化をはかり、学会ホームページに掲載した。

学会ホームページの管理運営は、国立情報学研究所の学協会情報発信サービスを利用し、ドメインを取得後、名古屋大学総合保健体育科学

センターから国立情報学研究所のサーバーに平成 16 年 6 月に移転した。更新作業は、理事会の決定により「NPO 法人パソコン丸ごとアシスト」に委託をすることになり、業務委託契約書（平成 16 年 6 月 1 日から平成 17 年 3 月 31 日まで）を 6 月 1 日に寺田学会長が委託業者と交わした。更新作業は、随時順調に行われた。

東海体育学会公式ホームページ

<http://www.soc.nii.ac.jp/tspe/>

平成 16 年度東海体育学研究セミナー報告

企画委員会 村 瀬 智 彦

平成 16 年度東海体育学研究セミナーは、2004 年 6 月 26 日(土曜日)に中京大学名古屋キャンパス・センタービル 7 階 702 教室において開催されました。「健康づくりの運動を科学する」をテーマとして豊田工業大学の斉藤満先生の司会により、中京大学の種田行男先生と名古屋大学の高橋義雄先生には講演、株式会社ティップネス石川英明先生には実技紹介をしていただきました。当日は 70 名以上の方が参加され、限られた時間ではありましたが、講演あるいは実技紹介に関するディスカッションも活発に行なわれました。各先生からいただいた講演および実技紹介の要旨は以下の通りです。

「健康日本 21 に基づく運動プログラムとその実践方法」 種田行男(中京大学)

健康日本 21 は日本国民の「健康寿命の延伸」と「生活の質の向上」を目指して、厚生労働省が策定した健康づくりのための国家施策である。その基本方針としては、①一次予防の重視、②健康づくり支援のための環境整備、③目標の設定と評価、④多様な実施主体による連携のとれた効果的な運動(ムーブメント)の推進があげられている。このような方針に基づき、運動・栄養・休養・飲酒・喫煙・口腔衛生などの各分野で生活習慣の改善が図られることによって、生活習慣病の危険因子である肥満・高血圧・高脂血症・高血糖者が減少し、延いては癌・心臓病・脳卒中・糖尿病などの疾病への罹患が抑制するものと予測されている。その実施に向けて 9 分野の重点領域が定められ、2010 年までに達成すべき数値目標と各分野での具体的対策がたてられた。現在は地方自治体・民間団体・企業・学校などでこれらの基本方針を逸脱しない範囲で現場の特性に応じた修正を加えながら徐々に実施されつつある。身体活動・運動分野においても努力目標値が設定され、健康のために身体を動かす人の割合を現在より 10%増やす

こと、1 日の総歩数を成人では 1000 歩、高齢者では 1200~1300 歩増やすこと、そして運動習慣を有する者の割合を現在より 10%増やすことなどが提示されている。しかしながら、これらの目標を達成するための具体的対策は健康日本 21 に示されていない。従って、この課題を解決するためには、これまでよりも多くの人が運動習慣を形成し継続することが重要であり、そのための効果的なプログラムの開発が急務と考えられる。そこで、運動行動の変容のために行動科学と健康学習の理論に基づいた対人プログラム(個人目標の設定、運動実践のセルフモニタリング、個別相談)と 2 種類(職域、家庭)の支援プログラムを開発した。本セミナーではプログラムの内容紹介と、そのプログラムを職域での生活習慣病予防および地域での介護予防に応用した際の介入効果について報告する。さらに、健康日本 21 の目標達成のためには、個人の健康づくりを支援するための環境(システム)整備、すなわち「健康なまちづくり」が不可欠と考えられる。何故ならば、どんなに有用なプログラムであっても、そのプログラムがより多くの人に活用されなければ目標の達成はありえないからである。

「エクササイズのエノベーション」

高橋義雄

(名古屋大学総合保健体育科学センター)

今回の発表では、1979 年創刊の『トレーニング・ジャーナル』から変遷を追い、ロジャーズ(1990)の定義で、その変遷を分析することとする。これまでスポーツに見られる現象にエノベーション概念の導入したのは、日本では古屋(1979)、山下(1994)、涌田(2004)がいる。

1950 年代は、パワー・リフティングがアメリカ中心に発達し、女性専用のウエイト・トレーニング場も開設した。戦傷者がリハビリを行い、ボディビルジムに入会するようにな

る。アメリカは、大統領青少年体力審議会の設置し、ヨーロッパのフィットネスへつながることになる。

1960年代は、ケネスクーパーのエアロビクス理論が普及する。1961年にはケネディ大統領が青少年体力の向上を提唱し、フィジカル・フィットネスということが言われた。1961年出版のハンス・クラウス『運動不足病』は、エクササイズ普及の推進力となる。

1970年代には、ノーチラスマシンやサイベックス・マシーンが発売される。またジョギングがブームになる。ウーマンリブ運動は、女性をエクササイズに進出させ、日本でも1978年に日本ボディビル協会のコンテストでミス・コンが実施される。1978年のうさぎ跳び集団骨折事件が、うさぎ跳びを問題化する。ジャッキー・ソレンセン創始のエアロビクスダンスも紹介される。

1980年代になると、日本でフィットネスクラブ増加する。ボブ・アンダーソン考案のストレッチングが日本に初登場する。また公共のスポーツ施設にトレーニングルームができた。そのほか東洋的なエクササイズにも関心が寄せられ、健美操が紹介されている。

1990年代は、エクササイズの多様化の時代である。アクアエクササイズ、ラバーバンドトレーニング、メンタルマネジメント、初動負荷理論、加圧筋力トレーニング、コーディネーショントレーニングが紹介される。

21世紀の近年では、武術・武道への関心、中高年向けトレーニング、スタビライゼーション・トレーニング、ピラティス、スローリストなど競技のためのエクササイズから健康のためのエクササイズが紹介されている。

こうしたエクササイズのイノベーションに影響を及ぼす要因には、問題あるいは必要の認識、研究・開発活動、商品化・標準化、社会システムとシステム規範との整合性がある。またイノベーションの普及に影響を及ぼす要因には、不確定性の軽減が大きく影響し、相対的有利性、両立性、複雑性、試行可能性、観察可能性があり、新しいエクササイズを採用するためのハードルがどれだけ低いかの影響する。

最後に、エクササイズのイノベーションは、

エクササイズには唯一最高のトレーニングは存在しないという不確実性への挑戦である。またイノベーションは社会的な構築物であり、エクササイズの開発も社会的な影響を受ける。またイノベーションはその技術と関連の深い科学の進展と密接に関わっており、今後とも学術研究の振興が必要である。

「ピラティス&ヨガ」

石川英明

((株)ティップネス、スタジオアドバイザー)

■ピラティスっていったい何？

What exactly is Pilates?

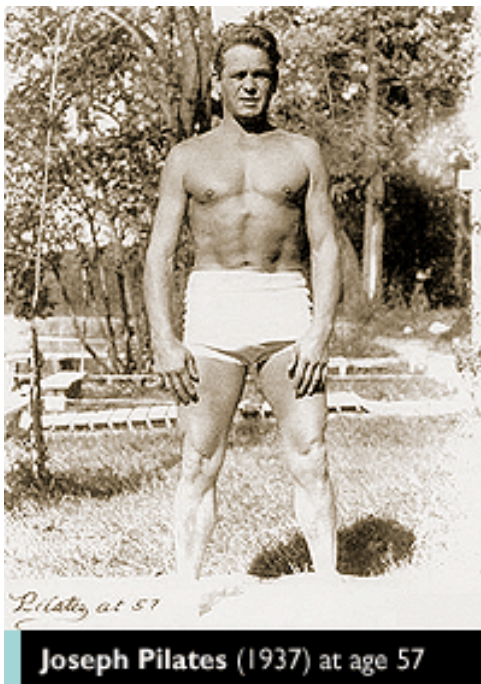
ピラティス・メソッドはボディ・コンディショニングのひとつです。およそ70年前、ドイツ人のジョセフ・ピラティスによって開発されました。産声を上げてからしばらくの間、ピラティスのトレーニングはダンスやパフォーマンスアーツの世界に封じ込められ、一般にはなじみのないエクササイズとして存在していました。近年「マインド／ボディ・エクササイズ」すなわち「意識して身体を動かすエクササイズ」への関心が高まり、これを契機にピラティスのコンセプトはフィットネス・トレーニングの最前線で脚光を浴びるようになりました。マドンナ、シャロン・ストーン、ジョディ・フォスターといったセレブリティたちがこぞってピラティスを始め、その素晴らしさについて身を持って実証しています。

ピラティスはストレッチや筋力強化のための完全なエクササイズ・システムです。ジョセフ・ピラティスは自身の開発したメソッドについてこう語っています。「身体を均一に鍛え、悪い姿勢を矯正し、身体の活力を取り戻し、精神を鼓舞し高揚させる」ものだ。ピラティスはまた、筋力、柔軟性、バランス、コーディネーション、身体に対する意識を高めます。ピラティスのエクササイズはヨガ、体操、マーシャルアーツを融合し開発されました。筋肉を大きくせずに強化できるのが素晴らしい点です。グループ・エクササイズでもプライベート・セッションでも、また、エクイップメントを使用しても使用しなくても、ピラティスは始められます。

■ ジョセフ・ピラティスって誰？

Who is Joseph Pilates?

「我々は心の精神的機能と身体のフィジカルな限界を認識しなければならない。そうすれば、その2つを完璧にコーディネートできる」
ジョセフ・H・ピラティスは1880年ドイツのデュッセルドルフ近郊で生まれました。幼少期からくる病、ぜんそく、リウマチ熱などさまざまな病気に悩まされたため、ピラティスは健康になりたい一心で体操、ボディビル、スキーなどを始め、生涯にわたってフィジカル・フィットネスに情熱を注ぎました。さらにヨガや禅の瞑想といった東洋のトレーニング・メソッドについての勉強も怠りませんでした。こうした努力が実り、10代の頃には解剖学のクラスでモデルをつとめるほど申し分のないフィジカル・コンディションを手に入れていたのです。



1912年ピラティスは生まれ故郷のドイツから英国に渡ります。英国ではプロ・ボクサー、サーカスの芸人などさまざまな仕事について生計を稼ぎました。ロンドン警視庁の警察官に自己防衛術を教えたこともあります。第一次世界大戦中はインターンとして働きながら、独自のエクササイズ・システムの開発を続けました。この時期ピラティスはベッドに寝たきりになった患者が筋力や柔軟性を鍛えるエクササイズを続けられるよう、ベッドから取り外したスプリングを使ったマシンを

開発したのですが、ここにスプリングの抵抗とスライドするキャリッジを備えた現代の「リフォーマー」の原型を見ることができます。

1920年代ピラティスはニューヨークで最初のピラティス・スタジオを開きます。すると、パフォーミングアーツの世界から彼の熱烈なファンが続出しました。マーサ・グレアム、ジョージ・バランチャイン、ハンヤ・ホームといったダンスの世界の第一人者たちが、パフォーマンス向上と怪我防止のためピラティス・メソッドを取り入れたのです。

ピラティスは1967年にその生涯を閉じるまで、最愛の妻クララとともにエクササイズを教えマシン開発を続けました。彼は自分の理論とアイディアは50年先の時代を先取りしていると考えてるのが好きでしたが、21世紀が始まった今、ピラティスのトレーニングが世界中で注目されていることを考えれば、その考えもあながち間違いではなかったのです。

■ 「マインド／ボディ」ってどういう意味？

What does "Mind/Body" actually mean?

ピラティスは「身体をつくるのは精神（マインド）そのものである」というドイツの詩人・劇作家シラーの言葉を好んで引用しました。それがこの問いに対する完璧な答えです。ピラティスは自身のエクササイズ・テクニックを支える6つの基本原則を掲げました。

1 呼吸

呼吸パターンは動きのパターンと関係がある。呼吸によって酸素を身体のすみずみまで運んで体内の掃除を行い、血液の循環を促進させ、筋肉から不必要な緊張を解く。

2 正確さ

ピラティス・メソッドは動きの量より質を重視する。

3 センタリング

身体を中心もしくは「身体の原動力」すなわち腹部、臀部、背中の筋肉から動きを始め、動きをコントロールする。このコンセプトこそピラティスワークの真髄である。

4 流れるような動き

リラックスし深い呼吸を続けながら流れるように動くことで、身体から緊張を解き、怪我のリスクも軽減できる。

5 コントロール

コントロールはきわめて重要！ ピラティスのトレーニングは「はずみをつけて動く」こととは無縁である。

6 集中

ピラティスでは心（マインド）と身体（ボディ）はひとつのチームとして働く。どのエクササイズにも最大の集中力が求められる。身体を意識しながら動かし、一つひとつの動きについて考えること。

■ ピラティス・メソッドの特徴は？

What is so special about the Pilates method?

身体を鍛える従来のトレーニング方法は短くて太い筋肉をつくるものでした。まさに怪我をしやすい筋肉組織をつくるためのものだったのです。ピラティスは脊柱を引き伸ばし、筋肉の弾力性と関節の柔軟性を高めます。力と柔軟性のバランスをとることで怪我のリスクを大幅に軽減できるのです。

ピラティス・メソッドは 500 種類以上のエクササイズから成り立っています。マットによるワークアウトもあれば、ジョセフ・ピラティスによって考案されたスプリングの抵抗を利用するマシン（現在の「リフォーマー」など他多数）で行うものもあります。ピラティス・トレーニングの中核をなすコンセプトは、「身体の原動力」すなわち身体のコア（腹部の深層筋、臀部の筋肉、脊柱のまわりの筋肉）を強化することです。ピラティスによるトレーニング・プログラムは骨盤と肩甲帯を安定させ、「身体の中心」から始める動きによって身体全体をストレッチし強化するものです。

ピラティスは複数の筋肉群を同時に使い流れるような動きを作り出すことを強調します。正しい呼吸法と集中力こそピラティスの要です。この2つによってピラティスは身体と心のための真のワークアウトとなります。多くのエクササイズが抱える問題点は、もともと強い筋肉をさらに鍛え、弱い筋肉は無視したままであること。ピラティスは違います。効果的な動きのパターンを身体自身が取り戻す手助けをするのです。だからこそ、リハビリ

中の人々、プロのアスリートやパフォーマー、また良い姿勢や健康を維持したいと願う人々すべてにとって非常に有益なエクササイズとなるのです。



東海体育学会第 52 回大会を終えて

稲 村 欣 作（静岡大学）

東海体育学会第 52 回大会は、平成 16 年 11 月 13 日（土）、静岡大学静岡キャンパス共通教育 B 棟において開催されました。8 年ぶりの静岡大学開催ということにとまどいもありましたが、第 51 回大会の方法にならって計画と準備をさせていただきました。特別講演とシンポジウムについては、静岡らしさとタイムリーなテーマを考え、静岡で活躍されている方の講演、および研究と現場をつなぐテーマを企画しました。

当日は、会場受付などを設置する場所がオープンのピロティーですので、雨を心配しましたが幸いに晴天となり、のびのびとセットすることができました。参加者は顧問：3 名、会員：70 名、非会員：14 名、学生：24 名、合計：111 名と名古屋地区での開催とほぼ同等の人数になりました。遠方より多くの方々にご参加いただきまして、誠にありがとうございました。



午前の一一般発表では、16 題の演題を受け付け 2 会場に分かれて発表・討論が行われました。分野別内訳は、体育社会学：1、体育経営管理：1、体育心理学：1、運動生理学：3、スポーツ人類学：1、体育科教育：1、体育方法：2、測定評価：4、保健：2 でした。

午前中の A 会場ではやむを得ず 1 題目の発表がキャンセルとなったため、2 番目の発表者から予定通りに 7 本の発表を実施しました。健康

状態調査（佐藤氏）や身体意識調査（鶴原氏）およびジェンダー調査（芹澤氏）はサンプル数も多く、充実した内容でした。また山本氏の身体運動システムについては難解ではありましたが丁寧な発表に好感が持てました。ローンボウルズ（吉田氏）に関しては新種目の紹介の感がありましたが、今後の研究と普及に期待がもてます。荒川氏と小幡氏はともに資料を用いての発表であり、体育の原理的・歴史的背景に視点を当てたものでありましたが、焦点を絞った内容にすればさらに盛り上がったと思われます。

また、B 会場では午前 8 演題の一般発表があり、各演題とも活発な質疑応答が行われました。会場には 20～30 名ほどの参加者があり、熱い議論が交わされる中にも物理学の立場から見たスキーの滑降解析について運動学分野の研究者および指導者と物理学研究者との考え方にミスマッチなどがあり、笑いが飛ぶなどの和やかな雰囲気もありました。発表内容からの争点などを紹介すると、体育方法ではジャンピングヘッドの空中動作において重要な膝の屈曲伸展動作を指導する方法など、実際の指導現場における議論が交わされ、保健分野の発表では一般大学生における健康維持のための栄養摂取をどう改善するべきか、運動を行っていない学生の関節弛緩性および脚アライメントの異常発言率をどのように考えるべきかについて意見交換がありました。また、運動生理学分野ではラットを使ったジャンプトレーニングが骨形成に及ぼす影響やヒトの筋運動による PGAM 活性について質疑応答があり、ジャンプ高による運動強度設定の重要性が指摘された外、血清 PGAM 活性が筋運動とどのように関わっているのかという点については先行研究がほとんどなくこれからの研究であろうという意見も出るなど萌芽的な一面も覗かせる内容でした。A 会場 B 会場とも、全体的に PPT を使用した発表は分かりやすく、また質疑応答も活発に行われたようです。

午後の総会は 13 時から開催しました。今回は役員改選がありませんので 1 回の総会でした。寺田会長と芳賀直哉静岡大学副学長からご挨拶をいただいた後、事業報告をはじめ一連の議事がスムーズに進み、予定より短時間で終了しました。



特別講演は、14 時 10 分から開始しました。「スポーツにおける放送の役割と課題 ―スポーツ現場の 30 年―」という演題で NHK 静岡放送局チーフアナウンサーの佐塚元章氏(非会員)からの講演がありました。スポーツ報道の果たしてきた役割、問題点の指摘から、報道のあり方のみならずスポーツの報道に対するあり方など、今日の課題を考えさせられる講演でした。詳細は「東海保健体育科学 Vol.26」をご覧ください。

シンポジウムは 15 時から「体育・スポーツの知をすべてのフィールドへ」というテーマで、水上博司氏(三重大学)と松井恒二氏(静岡大学)を座長として、(1)競技スポーツとの連携から「スポーツ科学応用の実際と諸課題」(星川佳広氏:浜松ホトニクス(株))、「サッカー競技におけるフィジカルコーチの役割」(菅野淳氏:日本サッカー協会)、(2)中高年健康スポーツとの関連から「袋井市におけるウォーキング事

業の展開と今後の課題」(富田寿人氏:静岡理工科大学)、(3)地域スポーツ実践者の立場から「NPO 法人卓球交流会の活動の実際」(吉田和人氏:静岡大学)の発表と討論が行われました。体育・スポーツの知を発展的にフィールドへ引き出し、社会に還元していくことについての考え方と具体的手法の発表があり、熱い討論がなされました。2 時間の設定では短かったようで、最後の討論時間が非常に短くなったのが残念でした。詳細は、プログラム抄録集をご覧ください。

今回、懇親会は開催しませんでした。終了後 2~3 の方にお伺いしましたところ、おおむね学会大会にご満足いただけたように思われ、実行委員として安堵いたしました。ご多忙の中を講演とシンポジウム、および一般発表にご協力をたまわりました皆様には、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

学会大会の準備・開催に当たり、多くの方々・企業・団体から有償・無償のご援助とご協力をたまわりました。また、学会大会委員会、学会本部事務局の皆様から多くのアドバイスをいただきました。本学教職員と学生を含め、関係各位のご協力に対して心からお礼申し上げます。最後に、次回大会のご成功を心よりお祈り申し上げます。



東海体育学会第 53 回大会のご案内

会員が「志を同じくする」とは何か？ その再確認の場に！

～東海体育学会第 53 回大会および総会(選挙)の開催に向けて～

実行委員長 新井野 洋 一 (愛知大学)

東海体育学会第 53 回大会および総会(選挙)の開催概要

期 日 2005 年 10 月 30 日(日) 9 時受付開始

会 場 愛知大学車道校舎(地下鉄桜通線「車道」①番出口下車 1 分)

内 容 研究発表、シンポジウム、総会、理事会(講演会、懇親会は実施しません)

参加申し込み・研究発表申し込み・抄録原稿提出締め切り

すべて 9 月 3 日(土)とします。

事務局 〒441-8522 豊橋市町畑町 1-1 愛知大学豊橋体育研究室 新井野 気付

TEL 0532-47-4180 FAX 0532-47-4151 niino@vega.aichi-u.ac.jp

上記または村瀬智彦 murase@vega.aichi-u.ac.jp まで

皆さん、こんにちは。上記のように、私どもが、東海体育学会第 53 回大会の実行委員会を引き受けることとなりました。ご満足いただける大会となるよう一生懸命準備と運営に努めたいと思っています。何卒よろしくお願い申し上げます。この程度の挨拶で十分と思っておりましたら、「もう少し実行委員長らしい一言を!」という指摘に、不勉強を反省しております。ということで、表題のような言葉に思いを凝縮させたつもりでございます。

研究は、目的、対象、方法を基本構造に展開されています。学問成立の基本要件と言うこともできましょう。したがって、学会とは、研究の目的、対象、方法を、(最大公約数的か最小公倍数的かはともかくも)共有し合う者の集まりと定義されましょう。

しかし、時代の変化と科学、技術の進歩は、研究の目的を拡散させ、対象を広範にし、方法を多様化させてきました。その結果、研究内容は高度化、複雑化、細分化し、異なる分野間の遊離を強化させました。かくして、学会は、巨大化時代に終止符を打ち、目的や対象、方法の相違を根拠に再編、分離が繰り返され学会数の増大時代へと移行しました。同時に、たとえば人間が自然的・物質的存在であるとともに象徴的・比喩的存在、行動的・確率的存在、社会的存在であるという解釈に基づくように、総合的な視野とインターディシプリナリー・アプローチ

が強調されてきたことも併記すべきでしょう。また、IT の驚異的な平準化は、研究生活そのものを根底から変化させていることも特記しなければなりません。IT は、研究情報の瞬時の交換を可能にしたばかりでなく、研究段階における人間関係、口頭発表や紙ベースの論文のあり方にまで変更を要求しているように思えます。特に、若い研究者にとっての研究現場は、膨大な情報量との過酷な戦いの日々となっています。それがために、グローバルな思考が育成される場面を失い、狭い領域に埋没してしまう恐れも危惧されます。さらに、若い研究者にとっての未来は、職業という観点では、決して明るいものではありません。私は、幸せな時に育ったようです。

さて、最近の東海体育学会大会における参加者、発表演題数は減少傾向にあるそうです。それは、学会の役割の再考を求める現象であると理解すべきかもしれません。確かに、学会の第一の役割は、イマジネーションとオリジナリティを蓄積させた研究成果を発表→他者の評価を受ける→是正点を確認する→自分自身のものにする→新たな研究を開発するという機会を提供することでしょう。しかし、学会という集団が、何らかの志を同じくする仲間の集まりとして発足したものであることを忘れてはなりません。会員同士の懇親を深めるといったことも大切でしょうが、学会全体に「同じくする志とは何か」

を問い続ける体制が堅持されなければ、学会の存続そのものが難しいということでしょう。

東海体育学会会員の「同じくする志」とは何か。第 53 回大会が、再考の場になることを期待致しております。大会回数と同年齢の私も、

「情報量が多すぎる」「雑務で忙しい」という逃げ口上を述べないで、さまざまな先生の発想と発言の中に「同じくする志」を再発見してみたいと思います。10 月 30 日(日)にお会いしましょう。

【奨励賞受賞談】

学術奨励賞を受賞して

春日井市保健センター 佐藤 敏郎

この度、東海体育学会学術奨励賞を頂きまして、誠にありがとうございました。

勤務上、他の先生方との交流も少なく、まだご存じない先生方も多いと思いますので、自己紹介からさせていただきます。私は日体大卒業後、中学・高校で体育教員として 5 年間勤め、現在の春日井市保健センターに勤務するようになりました。身分は春日井市の外郭団体の職員(健康運動指導士)であります。現在の主な業務は、医学検査・運動負荷試験・体力測定などを行なう「運動健診」の体力測定や運動指導および受診者対象の運動教室の指導です。10 年程前から大量のデータを取り扱ううちに、その分析の必要性を感じ、業務とは別に研究を進めてきました。幸いにも優れた指導者に恵まれ、これまでに学会発表や学術論文を公表することができました。

また、平成 16 年 4 月より金沢大学大学院自然科学研究科博士後期課程に入学し出村慎一先生のもとで「中高年者における健康状態と体力水準との関係の程度の定量化及び健康度に対する各体力構成要素の貢献度」をテーマに研究を行なっています。現在は仕事と研究で忙しい毎日を送っています。

当センターで行なっている「運動健診」は平成 3 年からスタートし、当初は翌日の受診者もないという状況で閑古鳥が鳴いていましたが、15 年目を迎える今日では年間で約 800 名の受診があります。毎年受診する人も増加しており約 80%の人が継続受診者で予約者も約 700 名と盛況です。また、論文で紹介したウォーキングを行なう運動教室は、バ



レーボールコート 1 面が取れるほどの体育館にもかかわらず毎回 100 名以上の人が参加しています。

さて、今回受賞した論文「中高年女性における 1 年間の習慣的運動実施による体力変化—運動教室参加者を対象として—」は、これまでに行なってきた研究とは違い現場の運動効果を検証したものです。自分たちの開催している運動教室の効果を検討する必要性は認識していましたが、現場のデータを特に縦断的に分析することは、調査期間中の対象者の把握などの問題から困難な面が多くありました。これまで数多くの運動教室を開催しながら、なかなかこのようなかたちにできなかったのが、今回このような機会に公表できて嬉しく思っています。

論文中でも触れていますが、地域における健康・体力づくりは、これらの取組みを評価・分析し、積極的に情報を住民に公開・提供し

ながら地域特性を重視した健康づくりを推進することが重要であると思います。このような研究は現実的な意義を持つと考えられます。今後も諸先生方のご指導・ご助言を賜りながら、10年以上にわたり蓄積されたデータの分

析・検討および現場の運動教室などの効果の検証の両面から研究を進めていきたいと思っています。これからも、ご指導のほどよろしくお願いいたします。

【在外研修報告】

在 外 研 修 報 告 I

プレミア・ラグビークラブのマネジメント：大虎軍に昂進する英国人氣質

名古屋大学総合保健体育科学センター 佐々木 康

イングランドラグビーのプレミアリーグに所属するレスター・タイガースは全イングランド大会優勝がカップ戦 5 回（1978-79、79-80、80-81、92-93、96-97）、プレミアリーグとその前身であるチャンピオンシップ戦（97 年からプレミアシップ）も同じく 5 回（1987-88、94-95、98-99、99-00、00-01、01-02）という優秀な成績を収めてきたエリートクラブです。2000 年、2001 年には欧州チームとして初の選手権連覇クラブと成り、さらに 2003 年第 5 回ワールドカップを制したイングランド代表にはマーティン・ジョンソン主将以下 7 名を輩出し、世界の頂点到達への多大な貢献を世に知らしめることになります。注目すべきはこのレスターが他クラブの経営窮状をよそに黒字化にいち早く成功した点にあるのですが、ロンドンのような大都市圏ではなく人口 28 万人の平均的地方都市をホームとするこのクラブがどのようにして良好な経営状況を構築してきたのでしょうか。これが筆者の文部科学省在外研究（16 年 3 月－17 年 2 月）の背景と着想に至った経緯です。

1997 年のリーグ・プロ化によりクラブをめぐる伝統的アマチュア価値、ゲームの構造と文化は変わってきています。クラブは商業主義圧力への戦略的対処がもとめられ、ゲームにおける優先論理、すなわち代表かクラブかといった優先原理さえ崩れだしています。在外研究中は発祥ユニオンであるイングランドにおけるラグビープロ化研究を参照しつつ、プロ化変動期において競技成績と経営の両軸ともに安定構造を構築してきたクラブの自己組織化について直接イ

ンタビューを繰り返しながら考察していました。

詳しい内容はここでは説明しきれませんが、このクラブの ETHOS（組織的性格）のひとつは地域出身主軸主義で効率的なアカデミー・シニア一貫指導体制を貫くというディシプリンを固持する点にあるようでした。もちろんグローバル化の渦中で海外からの補強選手もいます



が、それは若く潜在力ある選手に限ってきました。頑固な地域主義が、強化・財政・地域関係創造という、プロクラブが解決してゆくべき複合的 REGIME(統治)に対する支援を集めてきたようです。大半のクラブが海外高額選手の維持費で自らの首を絞めるという宿痼に苦しむ中、こうした地域主義が貫けるということは、逆に言えばグローバルには選手人口が少ないことの裏返しでもあるのですが、その点を差し引いて

も、一クラブが地域内で世界レベルの選手を多く育成し、母国の悲願たるワールドカップ優勝に大きく寄与したという事実はファンやスポンサーのクラブ求心力を昂進させてきたことに間違いないでしょう。

写真は恒例となっている小児病棟の突然訪問です。どこの病院に行くかは直前まで知らされ



ません。優勝カップに入れられた子供は「急になにすんだ、よってたかって」と困惑顔ですが、母親は、まるで日本のお相撲さんに抱きかかえられる子供をみつめるかのように満足気です。クラブの選手会では、年金対策の積立金の一部

を定期的に小児病棟に寄付しています。大半の選手が地元出身なので、病院周りも皆よく知る施設へのごく日常的な訪問活動です。5月に勇退する主将マーティンジョンソン(写真黒トレーナー)に日本とも交流をと提案して帰国したのですが、「それでは6月頃に日本に行こうか」とメールを送ってくれています。こうしたリーダーたちの飾り気のないフランクな対応と軽快なフットワークが、クラブをめぐる経営関係・環境の連鎖を作り上げているのではないのでしょうか。英国のトラキチ、タイガースの熱狂的ファンはぎゅうぎゅう詰めのホームスタジアムでラガー片手に声を荒げる週末を待ち望んでいるのです。「GO! Tigers」

在 外 研 修 報 告 Ⅱ

愛知県立大学 丸 山 真 司

2004年4月から10ヶ月間、ドイツのBielefeld大学スポーツ科学科において、①ルドルフ・ゲストファーレン州(NRW州)の新スポーツレアプラン(指導要領)開発過程(理念形成、構成原理、手続き論等)、②改革レアプランを現場

のスポーツ教師がどのように受け止め評価し学校現場に反映しているのか、③レアプランづくりの土台となる実際のスポーツ授業実践の観察・分析と現場教師との交流というテーマを掲げ在外研究を行なってきました。



高校での体育理論のクラス・授業風景

研究に関わって ースポーツレアプラン(指導要領) 開発プロセスー

研究テーマの一つである NRW 州のスポーツレアプラン(指導要領)の開発プロセスの特徴を簡単に紹介してみたいと思います。その一つ挙げれば、それはその開発過程で学校スポーツの「正当化(Legitimation)」に関わる議論が研究者、スポーツ教師、学校長、行政官、州議会各

政党のスポーツ担当者を巻き込んでオープンに展開されている点です。今回の NRW 州のスポーツレアプラン作成にあたっては、まずレアプランの理念づくりにおいて考え・立場の異なる研究者二人に「公開シンポジウム」で問題提起をさせ議論させます。さらにこの公開シンポジウムでは州議会で議決権を持つ各政党のスポーツ担当者による学校スポーツ状況とその政策についての報告、同時に研究者、行政官、現場スポーツ教師、校長等を含む各学校種の作業グループによる報告があり議論が展開されます。指導要領が出来上がるまでにこうした大きな公開シンポジウムが3回（刊行されている）、各作業グループによる報告書もその都度刊行されてその議論のプロセスが公開されます。また、インターネットの州教育研究所ホームページにはレアプランに関わる情報が公開され、常時教師や親の批判や意見を拾い上げているのも特徴的です。こうして5年がかりで議論を重ね今回のレアプランが作成されています。批判・批評が当たり前として受け入れられ、このような議論の中で新しいものを創っていくという土壌がドイツにはあり、議論には公開、批判、共同決定という原則が根を下ろしているように思われます。議論は民主主義の前提です。議論のあり方は民主主義の成熟度を測る重要な物差しの一つであり、教育や学校スポーツ改革も当然この成熟度と密接に結びついて展開されていることを痛感しました。

生活の中で —Urlaub(長期休暇)—

こちらの大学で生活をしていてうらやましいと思ったのがウアラウプ（長期休暇）です。夏・春休みになると教員も事務の人も最低2週間から4週間は休暇を取り、のんびりと家族とともに旅行などをして楽しんでいます。彼らと話をしていると、私たち日本人との休暇の使い方、考え方、旅行の仕方が相当違うことを感じてしまいます。まずは休暇の旅行で国境を越えるのは当たり前という感覚。休暇はどこに行くのと尋ねると、フランス、スペインあるいはデンマークの海辺、スイスアルプスの山という答え。休暇での国外は少し離れた隣の町に出掛ける感覚です。フランスの海辺、スイスアルプスの山までの 600 km 程度は彼らにとってはそれほど

苦にならない距離のようですし、心理的負担もあまり感じていません。日本と違い陸続きであるということ、高速道路が無料、長期滞在施設の充実と安さ、2週間以上という時間的余裕がその背景にあると思いますが、それにしても日本人が国を越えるという感覚とその距離感覚の違いを感じます。こうした感覚の中にもこの文化形成の土壌があるように思います。陸続きであるがゆえに歴史的にも頻繁に文化は衝突と交流を繰り返しながら創られてきたと思われるし、EU 統合の流れもこうした感覚とは切り離せないように思います。また、私たち日本人の旅行との違いは、旅先では一ヶ所に落ち着いて2週間以上のんびりと過ごすことです。日本のレジャー傾向は「安・近・楽」とか「安・近・短」だと言われ、ある研究者は日本のレジャー・旅行を「回遊型」と言っています。夏休みに日本から来た友人たちと北ドイツを5日間で6カ所「回遊」する旅をしました。僕たち日本人にとってはそんな慌てた旅でもなかったと思いますが、ドイツ人にはこうした旅が信じられないようです。ゆったりとした時を楽しむ、これが旅であり、休暇だと思っているわけです。だから、日本のゴールデンウィークやお盆の混雑時に出掛け、休暇明けに“ああ、疲れた”と言う日本人はおそらく全く理解できないでしょう。休暇・旅行の楽しみ方、そしてその時間感覚が相当に違うように思います。そのせいか、ここでは仕事以外は、とりわけ休日はゆったりとした時間が流れているように感じます。その背景には、休むこと、長期休暇を取ることに對する彼らの権利意識があり、当然法律もそのような権利を保護しているわけです。こうした余暇の楽しみ方、時間感覚、権利意識と文化・政治・経済が相互に影響し合いながら彼らの文化生活、スポーツ生活が築かれて来たのでしょう。

「日本人の眼」と「ドイツ人の眼」の往復運動

ドイツで生活し始めて、ドイツの文化、風土、国民性、生活、教育、ものの考え方など珍しいことばかりが眼や頭の中に飛び込み、驚きの連続でした。日本では気づかなかったこと、当たり前だと思っていたことが当たり前でないことを数多く実感し経験しました。これは日本の文化や風土の中で生まれ育った私が「日本人の眼」

で日本とは違うドイツの現象を見たときの驚きや経験です。このようにものの感じ方、捉え方、考え方の違いに驚き、おののき、感動するというような強烈な実感を伴った経験や認識が新たな研究課題を発見し、研究のイマジネーションとエネルギーを与えてくれます。しかし、それはあくまで研究のスタートです。ドイツ滞在中、出原泰明氏（名古屋大学）から「日本人の眼」で見ると同時に「ドイツ人の眼」で見ることで、つまりドイツ的評価と日本的評価を区別しその関係や構造を描くことが大切だという指摘を受けましたが、研究を進める上ではこのように「日本人の眼」として見た問題意識をベースに持ちながら、そこからなぜこのような日本との違いや共通点が生じるのか、その背景に何があるのか、物事を相対的に捉えその関係や構造を探る思考、つまり日本人である私が「ドイツ人の眼」でもって再度その現象を考えてみる必要がある

ように思います。「日本人の眼」と「ドイツ人の眼」の往復運動の中で、日本の教育実践や研究を捉え直すこと、日本の実情に合った改革の手順や方法を考察することが重要な課題だと思っています。この往復運動のトレーニングこそドイツで学んだことかもしれません。これからまだまだこのトレーニングをし続けなければならないと思っています。そして、私を含めた日本の体育教師もドイツのスポーツ教師も「両者の目」を往復運動させながら相互に研究や実践が交流できればと考えています。そのきっかけがこの10ヶ月間で少し築けたように思います。特にドイツにいないとできない研究活動ができ、同時にドイツの風土、文化、スポーツ、教育、生活に直接触れ、その多くを五感を通して経験として確かめることができた有意義な在外研究でした。

【研究室訪問】

研 究 室 訪 問 I

岐阜経済大学体育研究室 高 橋 正 紀

メンバー

1967年に創設された西濃経済界と大垣市の要望により設立された経済系の大学（2学部4学科。理事長は土屋嶋 大垣共立銀行頭取）である。現在の専任体育教員は4名で学外から非常勤講師9名を迎えて授業を行っている。専任教員4名を就任順に紹介すると小野勝敏（62歳）スポーツ史・柔道、福地和夫（52歳）生涯スポーツ論・ラグビー、高橋正紀（42歳）スポーツ原論・サッカー、岸順治（43歳）スポーツ心理・陸上である。

体育・スポーツ関連科目について

体育・スポーツ関係の開講科目は、実技が1年次に必修科目として体育実技A、B（各半期1単位）と2年次生以上対象に体育演習A、B（各半期2単位）、講義が「健康とスポーツ」（各半期2単位）、「地域とスポーツ」（半期2単位）、

「スポーツの心理」（半期2単位）および特殊講義という科目枠で「競技力向上のスポーツ科学」（半期2単位・岐阜県スポーツ科学トレーニングセンター研究員によるオムニバス講義）が開講されており、必修としては1年次の体育実技2単位のみであるが、履修上の自由科目枠を使えば体育・スポーツ関連科目で最大14単位を卒業単位とすることができる。

数年前に行われたカリキュラム改革の論議の中では、体育実技を必修からはずすことで大幅にカリキュラム上の開講科目数を削減すると同時に体育教員にも専門ゼミを担当してもらうという強い提案もあったが、大学における体育・スポーツ実技の他の科目での代替不可能性を、日本における学校体育の意義・歴史と地域スポーツ環境（社会体育）の未成熟さなどから説明した結果、必修としての縮小は余儀なくされたものの上述したような状況へと至っている。

2006年4月開設申請中のスポーツ経営学科（定員70名 中高保健体育教員免許状、各種スポーツ指導員資格取得可能）について

この学科のねらいは、これからの社会における持続可能なスポーツ環境のために、スポーツ指導の能力とスポーツ組織を経営的観点からマネジメントできる能力を兼ね備えた人材の育成である。そのために中高体育教員免許や各種スポーツ指導員資格につながる実技・講義科目を通じて指導者としての資質を向上させ、マーケティングやマネジメントなどの経営学の基礎理論への理解をベースに、スポーツ産業やスポーツマーケティングなどの知識も獲得する。また、21世紀に求められる地域密着型の非営利スポーツクラブの可能性と課題への理解を、学内にあるスポーツNPO（後述）や近隣の総合型地域スポーツクラブ等との連携・協働をボランティア科目やインターンシップ科目を通じて深めることや、学科開設に伴って客員教授として迎える後藤俊彦（前全日本野球チーム監督）、岩崎洋三（メルボルンオリンピックボート代表）、小倉新司（メキシコオリンピック陸上代表）、森山泰行（元サッカー日本代表）などの講師陣による講義や実技からトップレベルスポーツについても学ぶことで、草の根スポーツからエリートスポーツまでの幅広い視野を持った指導者の育成を目指している。ちなみに、体育研究室の専任教員4名は学科の開設に合わせて新学科に所属変更し、この学科の専門科目担当教員となるので、来春からは体育研究室としても新たな歴史のスタートとなる。

地域と連携した地域密着型スポーツNPO法人の活動

地域社会において大学が果たせる役割のひとつとして、スポーツを通じての地域住民（青少年中心）の健全育成と地域社会の活性化を使命（ミッション）に、学内有志（職員、学生）、県サッカー協会有志と地域住民有志の協働によって、学内にNPO法人スティックルバックスポーツクラブ（<http://www.gifu-keizai.ac.jp/~nposs21/>）を2002年7月に設立した。種目はサッカー・陸上・柔道・ラグビーの4部門。その他にスポーツボランティア、IT、国



施設図：年間のべ4万人の利用実績（うち3万人が地域開放）を持つ人工芝サッカー場



施設図：近年急速に近隣小中高への地域開放が進んでいる陸上全天候トラック



施設図：2004年度に全面リニューアルされたトレーニングルーム

際交流の各部門を持つ。

サッカー部門は幼稚園児・小学生対象のスクール（180名）を底辺にジュニアユースチーム（24名）、ユニバ（岐阜経済大サッカー部）チーム（50名）、トップチーム（男35名女2

5名)、シニアチーム(20名)、ママさんチーム(10名)が活動している。男性トップチームの「FC岐阜」(東海社会人リーグ所属)は、岐阜県下初のJリーグチーム入りを目指しており、大学としても、「FC岐阜プロ化構想」を、地域貢献組織である岐阜経済大学地域連携推進センターの地域・人間スポーツグループにおける「岐阜県の活性化につながる産学官民連携の一事業」として位置づけ、全面的にバックアップしている。

サッカー以外の種目部門はスクール活動が基本で、陸上は「スポーツクラブひまわり」という名称で本学陸上部監督(本学職員)のもとで80名、柔道は国立岐阜工業高等専門学校柔道場で同校柔道部監督の指導のもと20名、ラグビーは本学ラグビー部監督(福地)が現在構想中という状況で、サッカーを含めすべてのスクール活動で合わせて50名以上の学生がコーチングスタッフとして活動している。(会員総数475名)

今後の体育研究室について

上述したように来春からの新学科開設に伴い岐阜経済大学体育研究室の新たな歴史がスタートするわけであるが、これまでどおりの教養教育としての体育教育に加え専門教育での人材育成をしていく中で、持続可能な地域スポーツ環境の構築に貢献できる「地域に根付いた体育研究室」となるべく、行政(県教育委員会スポーツ課)や行政の外郭団体(県体育協会、(財)岐阜県イベント・スポーツ振興事業団、岐阜県スポーツ科学トレーニングセンター)や地元スポーツ組織((財)大垣市体育連盟、NPO法人ごうどスポーツクラブ、池田町総合型地域スポーツクラブ)などとの連携を様々なレベルで深めてゆきたい。そして、平成24年度に開催される岐阜国体を初期目標に、岐阜県の地域計画局地域県民部地域スポーツ振興室が国体の基本構想で掲げている「国体後につながる地域スポーツ環境」実現への貢献を果たしてゆきたい。

研究室訪問Ⅱ

静岡産業大学スポーツ経営学科の展望

静岡産業大学 経営学部 小栗 和雄

静岡産業大学経営学部¹⁾は、1994年4月に開学して以来、「小粒だが東海にキラリとひかる大学」を基本理念とし、新しい大学教育モデルを創造するべく挑戦と変化を続けてきた。そして、2005年4月には全国の大学に先駆けてスポーツ経営学科を新設するに至った。

20世紀後半、経済発展によって国民の余暇時間が増大し、健康志向が高まってきたことから、スポーツに関連する用品産業、施設・空間産業、サービス・情報産業、メディア産業、健康関連産業などが世界的規模で著しく成長した。現在では、スポーツのビジネス化が急速に進み、様々なスポーツ産業の分野で多くの雇用が創出されている²⁾。また、磐田市の「スポーツのまちづくり」政策やジュビロ磐田の活躍など、本学はスポーツ産業や活動を活発に行うことができる



地域性にも恵まれている。こうした背景を土台に、本学のスポーツ経営学科では、スポーツ産業を対象とした経営学をはじめスポーツに関する社会学、医学、心理学などの幅広い知育を少人数教育で行い、成長著しいスポーツ産業界の

中でリーダーとして活躍できる人材の育成を主な目的としている。

また、本学科の教育システムについては、学生らが早い段階で将来の進路を模索・決定する、あるいはそれに向けた学習を効率的に遂行できるよう、これまでに経営学部が取り組んできたコンテンツを継続・改良していくことになる。第一に、未だ不明瞭な点が多い「スポーツとの関わり方」と「目指す仕事の具体例」を表1の表1

関わり方	目指す仕事の具体例	コース	必要な講義	取得可能・支援資格
楽しむ	クラブの経営者・スタッフ、 商品企画・開発・営業	スポーツ経営	マネジメント論、産業論、 マーケティング、流通論、 クラブ経営論、文化論、 社会学、ジャーナリズム論、 メディア論、マスコミ論、 広告論、情報論など多数 ※文頭「スポーツ」を省略	クラブコーディネーター クラブマネージャー など
見る・読む・聞く	スポーツ専門誌編集者、 スポーツジャーナリスト			
支える・演出する	イベントプロデューサー、 広告代理店営業			
教える・指導する	教員、地域スポーツ指導者、 コーチ、トレーナー	スポーツ教育	指導論、教育論、医学、 心理学、地域論、社会学、 ※文頭「スポーツ」を省略 運動生理学、トレーナー演習、 まちづくり論、地方自治論 など多数	高校教員免許 健康運動実践指導者 アスレティックトレーナー サッカーC級コーチ バレーボールC級指導員 など
まちづくり	自治体職員、 NPO 法人スタッフ			

を注いでいる。毎年、各教員の講義方法を公开发表する「ティーチングメソッド（教え方）研究会」を開催し、「今、講義で何ができるのか」、「どんなティーチングメソッドが必要なのか」を全教員で探求している。また、多くの大学で行われている「講義評価アンケート」は、学生主導で調査・分析・集計が行われ、厳しく直接的な学生の意見が講義に反映されている。そして、特筆すべきは、産官学連携による新学問領域の開発を目的として、スポーツ関連企業、団体、自治体の経営者やスタッフが毎週講義を行う「寄附（冠）講座」である。全6種類の寄附講座の中でスポーツ産業に関連したものとして、ジュビロ磐田による「ニュービジネスとしてのプロスポーツ論」、（株）ミズノによる「スポーツ産業論」、静岡県健康福祉部（予定）による「運動とウェルネス（仮称）」があり、学生らはスポーツ産業界の最新情報や現役ビジネスマンのノウハウをリアルタイムに学ぶことができる。

さらに、学生らが講義で習得した知識・技術を活用できる実践的な環境作りにも取り組んで

ように捉え、学生らが将来の進路を模索・決定しやすくしている。そして、各々に対応した学習（講義履修）モデルとして「スポーツ経営コース」と「スポーツ教育コース」という2コースを設け、学生らが将来の進路につながる講義や資格を的確に選択・学習・取得できるようにしている。

次に、経営学部全体として講義の充実にも力

いる。企業で就業体験を行う「インターンシップ」や「社会実践体験プラン」、学生が店舗を営営する「実験店舗」、学生による起業プロジェクト「磐田 SOHO プラザ」、地域住民を対象に学生が様々なボールゲームやトレーニングを指導する「SSU スポーツアカデミー（仮称）」などを計画・実行している。



一方、筆者の研究室³⁾は、スポーツ経営学科の新設に先駆けて2004年4月に発足した。以

来、若輩・浅識と自認しつつも、スポーツ経営学科における円滑な教育と研究の遂行に向けて準備を進めて来ており、その現状と今後の展望について報告したい。まず、教育面において、本研究室が担当する教育分野は、運動生理学、スポーツ医学、運動方法学、救急処置法であり、これらの知識をスポーツ教育コースにおいて体育教員（予定）やアスレティックトレーナー、各競技のコーチ等を志す学生に習得させることが第一の責務となる。ただし、スポーツ経営コースの学生が同様の知識を習得することは、彼らがいかなるスポーツ産業界に進んだとしても有益なものになると考えており、経営学と身体学の知識を併せ持つ人材を育成したいと考えている。また、講義では座学とともに実習を重要視し、現場で生きる知識と実践的な技術の習得を図りたいと考えている。2006 年度には約 500m²のトレーナー実習室兼トレーニングルームを含むスポーツ科学・トレーニングセンター（仮称）が完成する予定であり、活発な教育活動が可能になるものと考えている。

研究面においては、「産官学連携を生かし、学生と地域住民に還元できる研究活動」を念頭に研究環境を整えつつある。上述したセンター内には約 180m²の実験・測定室が設けられ、全国トップレベルにあるサッカー部や全日本大学野球選手権大会への出場経験をもつ野球部に所属する学生選手の競技力やトレーニング効果は勿論、一般学生や地域住民の健康・体力水準を測

定評価することができる研究設備を計画している。また、「SSU スポーツアカデミー（仮称）」の一活動として、学生や地域住民を対象にしたスポーツ科学公開講座、健康教室等を開催し、集積したスポーツ医・科学の「知」とその活用方法を還元・普及したいと考えている。

以上、新設されたスポーツ経営学科と筆者の研究室における今後の展望について報告してきたが、両者ともに未だ計画段階の部分が多く、今後の取り組み方次第でその優劣が大きく異なるは明らかである。浅学非才による筆者の力量不足は否めないことから、諸先生方からの御指導・御鞭撻をいただければ望外の幸せである。

参考資料

1) 静岡産業大学ホームページ

.....<http://www.ssu.ac.jp/>

2) 原田宗彦編著(1995) スポーツ産業論入門、.....第 3 版、杏林書院

3) 小栗和雄研究室ホームページ

.....<http://www.iwata.ssu.ac.jp/~oguri/index.htm>

静岡産業大学経営学部スポーツ経営学科および小栗研究室に関するお問い合わせ先

〒438-0043 静岡県磐田市大原 1572-1

TEL0538-37-0191（代表）、0538-36-8974（小栗研究室）

【特 集】

特 集：アテネオリンピック回想録

アテネオリンピック ホッケー競技に参加して

アテネオリンピック女子日本代表ホッケーチームコーチ
東海女子短期大学 小林 和 典

2004 年 3 月、女子ホッケーのアテネオリンピック予選がニュージーランドのオークランドで開催された。5 位以内であればアテネオリンピックに出場が決定するこの大会で、日本はみごとにオリンピック常連国を抑え、優勝でオリ

ンピック初出場を決めた。

この大会から帰国して、オリンピックの凄さを改めて感じさせられた。日本を出発するときには名古屋空港での見送りはわずかに 3 名であったが、帰国時には 50 名のマスメディアの人達

に関係者の出迎えを合わせると総勢 300 名が到着ロビーで出迎えてくれた。

この状況は、選手もスタッフも非常に興奮した。さらに、日本ホッケー協会が資金不足に悩んでいた時に、スポンサーとしてマクドナルドさんがなっただき、TV では「アッコにおまかせ」の番組で、和田アキ子さんにホッケー競技を多くの人達に広めていただき写真集まで発行していただいた。また、歌手の大黒摩季さんには応援歌「ASAHI」をつくっていただいて、会場まで来て応援をしていただいた。これらのこと意外にも好意的に物質共に多くの支援をたくさんの人から得ることができたのは、オリンピックに出場することがいかに凄いことであったのかを実感し、関係者一同感謝している。

この応援を受けながら日本女子ホッケーは 8 月 2 日にアテネに出発した。アテネの空港に到着するとすぐにトラブルに遭遇した、荷物が 1 時間待っても数個しか出てこなかったのだ。仕方なく数人の荷物だけをバスに積み込み、選手村に移動した。3 時間後に荷物がすべて届けられたが、遅れた理由を聞くと飛行機に積みきれなかったので、次の便で荷物を輸送したことが判明し驚いた。

選手村では、試合開始の 10 日前に到着したために村内の庭では芝を植えている状態であり、他国の選手もこれから入村する様子で選手達はまだ少なかった。選手村の宿舎は 2、3 階又は 4 階建ての小型共同住宅で大多数のユニットには、寝室が 4 つあった。1 寝室あたり 2 名の選手が宿泊し、1 ユニットに 2 つのバスルームがあり、各ユニットにはリビングとバルコニーがあった。また、寝室には、家具と備品が備え付けられ、エアコンは全ての寝室とリビングに設置されていて、まずまずの快適さであった。

食堂は 24 時間体制で何百人もの選手たちが同時に食事をとれる大きなスペースであった。また、各宿泊棟の付近にはスポーツ飲料水や水、ジュース類の自動販売機が置かれキーホルダーをつけると自由に飲むことができたことは、非常に便利であった。

アテネでは、非常に暑いとの情報を得ていたため、選手全員にアイスジャケットを用意しハーフタイムや試合終了時に着用するように考えていた。また、アテネに到着してすぐに脚を冷



選手村入村時の様子

却する目的で、大きなたらいを数個購入して試合に備えた。

しかし、実際には日中は 30℃を越す気温であったが、日本と比べると湿度が低く非常に過ごしやすい状況であったことと、試合が午前中の早い時間、もしくは夕方からの試合に組まれていたことであまり暑さに対する心配があまり必要なかったことは幸いであった。

大きな問題としては、選手村からホッケー会場までの移動であった。選手村からシャトルバスで約 40 分のところに競技場があり、シャトルバスのスケジュールの関係上、到着してから試合開始まで 1 時間しかない状況であった。この時間を調整するためにいろいろな手段を使い交渉を試みたが、最初は調整ができずウォーミングアップや選手の心理面において多少影響がでてしまったことは悔やまれることであった。しかし、競技が進むにつれて他チームからの抗議もあったと思われ、シャトルバスのスケジュールの変更が可能になった。



選手村での楽しい食事



試合開始前の日本選手達

ホッケー競技は 10 カ国が参加し、5 チームの 2 プールで予選を行いその順位で他プールとの順位決定戦が行われる方法であった。日本の最終目標は、「メダル獲得」であった為に、この予選プールで 2 位以内に入り 1-4 位決定戦に出場できるように試合に臨んだ。その為のキーポイントの試合は初戦での中国戦と考え、この試合に勝利あるいは引き分けにすることが、次の試合に勢いをつけ目標を達成できると考えた。

この目的を達成するために、私のコーチとしての役割の一つとして相手チームの戦術分析を行うことであった。方法としてはマッキントッシュのパソコンに、ソフトはゲームブレーカーを使用し、相手チームの試合のビデオをパソコンに取り込み、攻撃、守備、セットプレーや、キーポイントになる選手の特徴を抜き出して、選手に伝えることであった。このようなことは、どの国のチームでも行われているが、ランキン

グ上位国では、このような戦術分析の科学的技術がさらに発展していることに驚かされた。

それは、作業時間を短縮する為にパソコンをタッチパネルにして使用しているチームや、今試合中に起きた場面を映像として、リアルタイムでベンチに伝える方法を利用しているチームがあったことである。そのことが、すべて競技力と直接結びつくとは限らないかも知れないが、選手たちをサポートしている者にとっては、非常に興味深いものであった。オリンピックの大舞台の裏側でも、各チームの試合に対する準備や意気込みを感じることができた。



ハーフタイムでのミーティング

結果として今回のアテネオリンピックで日本は 8 位であり、最終目標のメダルには届かなかったが、選手たちは精一杯頑張ってくれたのは非常に嬉しく思う。これから、自分自身もこの貴重な経験を生かしホッケーのみならず、さまざまな分野においても精進努力したいと思う。

アテネオリンピックに参加して

中京大学体育学部健康科学科講師 本 田 陽

昨年 8 月に開催された第 28 回オリンピック競技大会に陸上競技日本選手団（役員 20 名、選手 39 名）の一員として参加した。これまで世界選手権、アジア大会などの国際大会にはコーチ・役員として参加した経験はあるが、オリ

ンピックは今回が初めての参加となった。今回は選手のコーチ及び選手団全体のマネージメントを担当する総務を兼ねるという役割での参加であったが、コーチ及び選手団役員の双方の立場から、アテネオリンピックを振り返ってみた

い。

コーチとしてのオリンピック

今回のオリンピックでは私が大学時代から指導する女子七種競技の中田有紀選手（SCTC 所属、中京大学OB）が代表に選ばれた。中田選手が女子七種競技で日本人初のオリンピック代表選手となったことは日本の混成競技にとっては大きな意味があるが、それだけに、ただ参加するだけではなく、国際舞台で互角に戦えたという結果を残すことが我々の大きな目標であった。

代表が決定してから強く感じたことは、マスコミや周囲の人々の関心の高さである。陸上競技の世界選手権は2年に一度開催され、民放でかなりの時間を割いて宣伝・放送されるが、その世界選手権とは比較にならないほどの関心の高さにまず驚かされた。特にスポーツ関連のメディアだけではなく、社会や報道、さらには芸能関連のメディア（テレビ、ラジオ、新聞、雑



メイン会場



選手村



試合会場にて（左筆者）

誌、特に女子選手に対しては男性週刊誌などからも）から多数の取材申し込みがあった。さらに所属先や地元市町村、出身大学、学校、知人や親族などによる祝賀会や壮行会が相次いで開催されるが、このような取材や祝賀会をいかにうまくコントロールし、本番に向けてじっくりと練習に取り組むかはコーチ・選手にとっては重要な課題である。種目別の世界選手権とは比較にならないオリンピックの特殊性を痛感した。

本番での我々の目標は、自己の日本記録を大幅に更新し、それによって何とか上位12位以内、理想的には8以内に入賞することであった。そのための課題は三つ。一つは本番までの間に全体的なレベルアップをはかり、7種目全てで自己ベストまたはそれに近い記録を出せるような状態にすること。二つ目は8月20/21日の試合に最高の状態に仕上がるように、時差調整や現地の気候への対応も含めて体調・メンタル面において調整すること。さらには、初めて経験するオリンピックの本番でどこまである場面では落ち着いてクールに、またある場面では自分のテンションを上げて大胆に戦えるかという点である。

本番の試合は理想的ではないにしてもまずまずの滑り出しであった。100Hで13秒94のセカンドベスト記録、続く走り高跳びでは1m76の自己ベストタイ記録と、日本記録を更新した6月の代表選考会とほぼ同じペースでの開始であった。

混成競技はメンタル的に非常に難しい競技である。世界のトップで戦うためには全く異なる7つの全種目で自己ベスト記録やそれに近い結果を残すという集中力が要求される。特に苦手



中田有紀選手

種目で集中力が途切れてしまうことはその後の競技にとっては致命的なミスになる。中田選手の3種目目は苦手の砲丸投げ。最初の2種目がまずまずの出来だったため、ここで一気に調子に乗りたいところであったが、午後の長い休憩（午前中の競技終了後はいったん選手村に帰って食事後点滴を打って休憩）によって緊張感・集中力が途切れたのか、苦手種目において他の選手との力の差を意識しすぎて萎縮、予定を大幅に下回る記録に終わった。

「一つの種目で失敗した後は次の種目ですぐに挽回する」というのが、混成競技の鉄則である。試合の流れが悪い方向に傾いたときはすぐに立て直したいところであったが、初日の最終種目200mでも思ったように身体が動かず、最低限の目標にしていた日本記録更新ペースから大きく後退してしまった。1日目終了後の我々の思いは共通していた：「二日目の走り幅跳びで一か八かの勝負に出て一発逆転をねらう！」

今大会中田選手にとって最大の勝負所となった2日目の最初の種目の走り幅跳び。強気で攻めるものの、気持ちだけが空回りしたのか助走があわず、2回のファール。あと一回ファールすればこの種目得点なしという絶体絶命のピンチに追い込まれた。オリンピック出場のかかった代表選考会では、全く同じ状況から3回目に起死回生の大ジャンプで五輪出場を勝ち取った。私からの指示は、「助走を無理矢理合わすな！ファールをおそれずに思い切って行け！」本人も当然そのつもりでいた。結果はテレビでも放映されたとおり、距離はでていたもののファール。混成競技において記録を残せずに得点なしに終わるということは最悪の結果であるが、最後の

跳躍で安全に記録を残すような跳躍をしていても、総合得点4871点で34人中28位が26位程度に変わっただけであろう。今でもあのときの決断は正しかったと信じている。こうして我々のほろ苦い五輪は終了した。

選手団総務としてのオリンピック

今大会陸上選手団は金メダル2、入賞6という好結果を残すことができ、総務としては肩の荷が下りたが、特に印象に残っているのはなんといっても、室伏広治選手のハンマー投げ金メダル獲得とそれに関わるドーピング事件である。



真実の金メダル

男子ハンマー投げ決勝終了直後、私はミックスゾーンで室伏選手を待っていた。各種目ともメダル獲得者は自動的に薬物検査が義務づけられていたため、選手団役員としてそれに同伴するためである。記者団のインタビューに答えた直後の室伏選手は、珍しく興奮した様子で試合中の様子を私に話した。優勝したハンガリーのアドリアン・アヌシュ選手が試合中にトイレに行ったことも……。

試合が終了し薬物検査を受ける選手は、競技エリアを離れた瞬間から薬物検査官の監視下におかれ、たとえトイレに行く際にも検査官が同行する。当然室伏選手にも検査官が付き、メダリストの記者会見終了後我々が薬物検査室に入るまで同行した。いったんこの検査室に入った後は検査が終了するまで部屋を離れることは許されない。ハンマー投げ3位に入ったベラルーシのシホン選手の姿も見える。しかしながら先ほどの記者会見の際にはいた金メダリストのアヌシュ選手の姿がどこにも見えない。検査官に

聞くとすでに検査を終えたという。アヌシュ選手は競技終了後の 20 分ほどの短い時間に検査を終了したということになるのである。その後アヌシュ選手と同じコーチを持つハンガリーの円盤投げの選手が優勝した際に、規定の量の尿を採取できず、それ以降の検査を拒否したため金メダルを剥奪されるという事件が起きたが、これによってアヌシュ選手への疑惑もさらに大きくなった。ドイツの選手団役員からは、アヌシュ選手には以前から薬物使用の噂があり、図式入りの詳細な手口を密告する匿名の手紙が

ドイツ陸上競技連盟に届いたという話も聞いた。I O C の対応は迅速であった。競技終了後アヌシュ選手はすでに故郷ごハンガリーへ帰国したという噂がながれたが、I O C は再検査を要求。大会終了まで選手は I O C の管理下におかれ、I O C からの薬物検査要請には従わなければならないが、アヌシュ選手はこれを拒否。それによって金メダルの剥奪が決定された。それ以降のことは新聞やテレビで報道されたとおりである。中田選手が体験したオリンピックとは別次元のオリンピックの現実がそこにあった。

目指す「夢」のオリンピック

—夢を夢で終わらせない—

中京大学水泳部コーチ 久世由美子

昨年行われた、アテネオリンピックに松田丈志は競泳 400m 自由形と 1500m 自由形、200m バタフライに出場しました。松田は現在中京大学水泳部に籍を置きますが、宮崎県延岡市の東海（とうみ）スイミングクラブの一員でもあります。私自身も中京大学のコーチでもあり、東海スイミングのコーチをも兼任しております。



東海スイミングクラブ
ビニールハウスプール

東海スイミングクラブは 1979 年（昭和 54 年）に地元延岡の水泳好きの仲間が集まって発足したクラブで、泳げない子供をなくし底辺拡大で水泳の好きな子供を増やそうというボランティアのクラブです。練習場所として延岡市

立東海中学校の屋外プールを使用しており、発足して 5 年後にプール全体をビニールで覆い、いわゆるビニールハウスになりました。寒くなって来るといかに南国宮崎とはいえ、屋外プールの水は冷たくなってとても泳げるものではありません。子供達が唇を紫色に染め、震える姿を見かねた父母やコーチ陣が、せめて風よけにでもなればと、奉仕作業でビニールハウスに仕上げました。これで冬場の寒さは若干は緩和されましたが、夏は温度が上がり過ぎ、サウナ風呂さながらとなります。この頃から水泳人口を増やすと同時に、競技力向上にも力を注ぐようになりました。

松田丈志がクラブに入ったのは、今から 17 年前。4 才の時です。初めはそんなに強い選手ではありませんでした。ただ同年代の子供達よりも体格的に恵まれており、速くなりたいという気持ちは人一倍強く、そのための練習は一所懸命になる子でした。小学低学年の時、九州地区の大会で 8 位に入賞しました。表彰されたその時の顔は本当に嬉しそうで「この笑顔をもう一度見てみたい」と思いました。「この子を強くしたい」との思いから、松田に自分よりも年長者のレースを見せるために中学生や高校生の大会にも連れて行くようにしました。「大きい



小学校低学年時の松田丈志

大会に出てみたい」「上には上がある」松田自身も幾度かの大会を見るうちに、何かしらを掴んだようで意識もかなり上がって来ました。

種目は自由形の短距離専門でしたが、肉体的にもタフでレース後の回復力も速いことから、長距離を泳がせることにしました。私の厳しい練習と指導に耐え抜き、順調に伸びて来ました。がその中では、時に激しい叱咤があり方言丸出しでの罵声があり、松田本人が納得しない事はトコトン話をするということの繰り返しです。その結果、中学校時代から全国大会でも優勝するようになりました。ある時、自由形のフォームに変な癖があることに気づき、その矯正のためにバタフライを取り入れました。ところがこのバタフライでも松田は柔軟な対応を示し、今ではタイム的には自由形よりも世界に近くなっています。

松田丈志が高校日本一になってから、私の夢は松田に世界を狙わせることへと膨らみ、オリンピックに行きたいという気持ちが強くなって行きました。しかしこれには大きな問題があり、半分はあきらめていました。それは、地元の高校卒業後の松田の進路問題です。宮崎県には水泳設備の整った大学はありません。松田が県外の大学に進学すれば、単なる主婦にしか過ぎない私は手を引かざるを得ないと考えていました。家庭もあり、延岡を離れられないと思っていたからです。そんな時に中京大学からのお話があった訳です。中京大学水泳部監督の高橋先生の話は「松田丈志にうちに来て貰いたい。但し条件としてコーチも同行してほしい。練習は水泳

部と別メニューで構わない。東海スイミングクラブの延長として中京大のプールを使えば良い」というものでした。

以前から漠然とした気持ですが、松田を大学に預けるならば人間性豊かな「鶴峯先生」と熱血監督の「高橋先生」のいる中京大学というのが頭にありました。主人に相談すると「折角高校日本一まで育てたのだから、その上を狙いたいというのは当たり前の話。ここでお前を引き留めると、松田がオリンピックに行けても、行けなくても、俺もお前もあとで後悔する。チャンスをものにしろ。行け」の言葉です。嬉しかったですがチャンスとは云うものの私にとっては、反面それはプレッシャーでもありました。愛知という慣れない土地で毎日が孤独感との戦いでもありましたが、オリンピックの夢だけは忘れませんでした。中京大学水泳部の皆さんも、私達の練習に理解と協力をしてくれました。

松田が日本選手権でオリンピック日本代表をものにし、私もパーソナルコーチに選ばれ時は「やった、ついにやった」という感じでした。代表に決まってからオリンピックまでは、海外での合宿が多く、松田の仕上がりも上々でした。私も普段と変わらず落ち着いた気持でオリンピックを迎えられました。レースの数日前に会場や選手村を見学しました。それほど大きいものではないと思いましたが、すごくきれいに整えられていて、これがオリンピックだいう盛り上がりを感じました。やはり普通とは違うと思ったのと同時に、いよいよ始まるとのワクワク感で一杯でした。

試合会場では世界の強豪選手がアチコチにいて、この中で戦うのだとドキドキしましたが、



オリンピック日本代表チーム

オリンピックに参加出来たことをあらためて嬉しいと感じました。

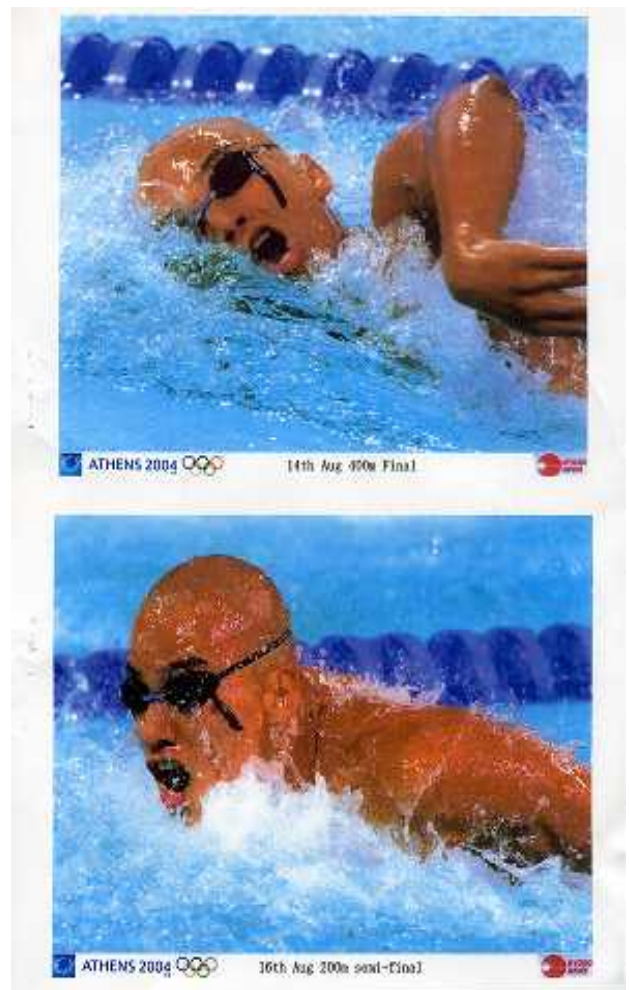
いよいよレース開始です。初日は400m自由形で午前中に予選が行われました。私はスタンドの中央でTBSの記者さんと一緒に見えました。さほどの緊張もなく、普段のレースを見るよりは落着いていたように思います。

松田丈志、400m自由形は決勝進出です。この時はさすがに何度も何度も電光掲示板も見上げたものです。その嬉しさは格別でした。後から聞いた話では400m自由形の決勝進出は日本勢としては40年ぶりのとのことで、嬉しさも倍増でしたがメダル獲得には至りませんでした。

この後、日本チームは各選手の奮闘でメダルラッシュです。松田丈志のオリンピック出場、決勝進出を喜んだものの、松田自身は残りの種目は決勝進出はならず、日本勢選手のメダリスト達の陰に隠れて居心地は良いものではありませんでした。でも今回のオリンピック出場で自信はついた、オリンピックはメダルが取れないと居心地の悪いものだということも味わった。これから目指す北京では絶対にメダルを取りたいと思いました。そのためにはこのオリンピックで経験した、嬉しさと悔しさを忘れないこと。体験した全てを今後の自分達に活かして行こうと考えました。

松田丈志はまだまだ伸びる、中京大松田の時代がきっと来る。その日を迎えるためには何をすべきかです。例えば、外人選手のパワーとスピードに対抗するための体力、一見お祭りムードのオリンピック独特の威圧感と重圧感に耐え得る気力、外国での体調の維持管理等々です。これには周囲の関係者皆様のお力を、よりお借りしなければならぬだろうと思っています。

今まで夢に見て来たオリンピックを、自分達の手で掴んで参加できたこと、これはこれでと



ても素晴らしい事でした。今後は先を見つめて精進して行きたいと思います。これからもまだまだ課題が多く平坦な道ではありませんが、この歳になってもまだ自分の夢が追える。松田丈志という夢を持たせてくれる選手が側にいる。そして夢を叶えるために手伝いをしてくれる家族、松田家の人達、友人や応援してくれている多数の人達に感謝したいと思います。

松田丈志には小さい頃から挨拶と返事だけは、しっかりやるように水泳以外のことも指導して来ました。

「勝っておごらず、負けてくさらず」

この戒めを一層噛みしめて努力して行きたいと思います。夢を夢で終わらせないためにも、頑張ります。

【追悼のことば】

故 加賀秀雄前学会長を偲んで

東海体育学会会長 寺 田 邦 昭

4月18日の早朝に架かってきた電話。加賀先生からのそれはいつもその時刻。てっきり、「一杯やりませんか」の誘いかと思って取った電話は、意外にも奥様からのものでした。

受話器の向うの「今朝方、主人が亡くなりました」の声にわが耳を疑い、絶句しました。

ご家族の説得に応じての入院から僅か一週間、原因は肝硬変とのこと、つい先ごろまでこよなく酒を愛しておられた先生のお姿からは想像もできないことでした。

加賀先生との出会いは40年ほど前、私が日本福祉大へ非常勤講師として伺った折でした。当時は大学の膨張期で体育施設の整備が間に合わず、劣悪な条件下での実技指導を余儀なくされた時代でした。先生はガイダンスに臨み、どのような環境下であれ、与えられた状況の中で創意工夫を凝らしベストを尽くすことの、また、与えられた課題に主体的に取り組むことの大切さを熱く説かれ、その情熱あふれる語り口と説得力に、学生ともども感動を覚えたものでした。

加賀先生は、1970年に東海体育学会の役員として選任されて以来、北大に赴任された一時期を除き、1993年度まで、広報担当理事としては、より充実した会報の発行に腐心され、研究・講演会担当理事としては、時宜を得た月例研究会や講演会の開催にご尽力くださいました。また、学会あり方検討委員会理事としては、学会の活性化や民主化に向け数々の有益なご提

言を頂き、それは現行の会則の随所に生かされています。

更に先生は、1994年度から6年間は理事長として、2000年度から4年間は会長として、研究交流委員会の創設や、役員に任期制を導入するなど、若手研究者の育成や学会の活性化を図るため、幾多の施策を講じられました。数年前、顔面に出来た帯状疱疹を押して、会長として学会理事会に出席されたことがありましたが、後日、ご家族から、失明の危険があり即刻入院すべしとの医師の勧告を振切ってのご出席であったと聞き、驚きと共に、先生の東海体育学会に対峙される真摯な姿勢に、深い感銘を受けました。

理事会や研究セミナーなどの帰り、JR中央線の顧客連として、中部大の池田先生ともども、鶴舞や千種・春日井など、沿線の居酒屋で道草をし、杯を重ねグラスを傾けながら、大学や学会のあり方などを熱く語り合ったのが、懐かしく思い出されます。

人一倍正義感が強く、情熱そして信念に生きられた加賀先生、長い間ご苦勞様でした。そして、有難うございました。

いずれ私もそちらに行きます。それまでに医者嫌いと肝臓だけは治しておいてください。それから、河岸の開拓もよろしく。また楽しい酒を飲みましょう。ご冥福をお祈りします。

加賀秀雄先生を偲ぶ

東海体育学会理事長 山 本 裕 二

加賀秀雄先生は、昭和31年4月に日本福祉大学に助手として採用された後、昭和34年6月に講師、昭和41年4月に助教授、昭和50年1月の教授に昇任されました。その後昭和56年4月より、北海道大学教育学部、および大学

院教育学研究科教授に転任されました。そして、昭和63年4月に名古屋大学総合保健体育科学センターに教授としてお迎えしました。平成3年4月からは、総合保健体育科学センター長ならびに名古屋大学評議員を平成7年3月まで2

期4年間お勤めいただきました。その後平成9年3月に停年退職され、名誉教授になられるまで9年間、さまざまな面で総合保健体育科学センターだけでなく、名古屋大学の発展のためにご尽力いただきました。

特に、名古屋大学では平成6年度より戦後新制大学発足以来継続していた一般教育としての保健体育科目の見直しが行われ、共通教育の中の基本主題科目「生涯健康とスポーツ」として名称、内容ともに一新されました。いわゆる教養教育の見直しであり、他の国立大学等が開講時間数や必修単位数の削減を余儀なくされる状況の中で、センター長として先頭に立って各学部との折衝に臨んでいただいたことにより、名古屋大学では開講形式や名称の変更はあったものの、法学部を除く全学部で4単位を必修とし

て位置づけることができました。このことは、単に名古屋大学の教養部改革への貢献だけでなく、私立大学も含めた東海地区の大学における教養改革の中での保健体育科目の位置づけに大きな貢献をしたものと思われま

す。名古屋大学だけでなく、東海地区の大学における保健体育教育の充実発展のために、まだまだこれからご指導いただきたいと願っていたところへの急逝の知らせでした。私たちの支えをなくした悲しみは言葉では言い表せませんが、私たちにできることは、先生の保健体育にかけ

恩師を偲んで

愛知学泉短期大学 秦 真人

今年3月1日に行われた体育史・スポーツ人類学研究交流会に欠席された加賀先生から「キミがやろうとしていることの関連史料がいくつかあるので、こんど渡します。」と次の日の早朝に電話をいただいたのが、私と先生との最後の会話となってしまいました。

加賀先生が名古屋大学にいらっしゃるときに、私は6年間、研究生として先生に体育・スポーツ史研究の指導をしていただきました。しかし、加賀先生との関わりは名古屋大学でお世話になる実に15年ほど前から遡ります。最初の出会いは私がまだ小学校4年生の頃、加賀先生の同僚であった私の父とともに、親子で福祉大学のスキー・ツアーに参加した時でした。始めてスキーに行くという私のために、先生はスキー靴選びからいろいろなことを熱心に私に教えてくれたことを今でも憶えています。そしてその時に、「加賀先生は体育・スポーツの歴史を研究しているんだよ」と父から紹介され、始めて体育史という研究分野が存在することを知りました。

先生と私の二度目の関わりは、私が体育教員を目指したいと考え始め大学受験に臨んだ時期でした。その時、加賀先生に受験の相談にのっ

ていただいた事があったのです。その後、私が大学・大学院に在学中の6年間、先生は北海道大学に籍を置かれ、私の大学院修了と同時に先生は名古屋大学に移ってこられました。まさに運命の巡り合わせといえるタイミングで、名大へ着任早々の先生のもとにお世話になることになり、先生と私の三度目の関わりの始まりとなったわけです。

私が研究生の間、先生は名大保体センター長という多忙な身であるにもかかわらず、単なる研究生である私に対して、時には厳しく実に丁寧な指導をしていただきました。特に方法論においては徹底的に手直しが入った憶えがあります。それについては、月一回のペースで社会科学の古典ゼミを設けていただき、6年間にわたって歴史の科学的な論証の仕方を勉強させていただきました。そしてそのこと一つを例にとってみてもお判りのように、何事にも妥協を許さない先生でした。その姿勢は、時には多くの敵を作ってしまうのではないかと私は内心ハラハラしながら見守っていたものです。しかしながら、先生は持ち前の独特な個性と社交性でもって、若輩者の心配事などなんのその、新たな人

間関係を次々と構築し、見事なまでに円滑な組織を作りあげたりしました。

今、思い出す先生のこだわりは、ビールはサッポロ、野球はタイガース。昼食は摂らず、連絡事は大抵早朝の電話。立派なカバンがあるのにもかかわらず、手には常に紙袋…。いずれも今となっては懐かしい思い出となってしまいま

した。

私にとっては学童期を含めた長い間、加賀先生には本当にお世話になったと感謝しております。この場をお借りして御礼申し上げるとともに、心からご冥福をお祈りいたしまして、恩師、加賀秀雄先生の追悼の言とさせていただきます。

【お知らせ】

庶務委員会からのお知らせ

庶務委員会委員長 池上久子

1. 日本体育学会代議員選挙報告

平成16年4月に実施しました日本体育学会代議員選挙について報告いたします。

日本体育学会会員に3月24日（水）に選挙要項を543通発送しました。4月26日（月）に締めきり、返送数126通でした。投票率は23.2%でした。5月7日（金）午後6時から南山大学において選挙管理委員会を開催し開封作業をしました。得票数4以上の選挙結果をお知らせいたします。

池上康男 22、寺田邦昭 18、山本裕二 17、桜井伸二 16、北川薫 15、島岡清 14、穂丸武臣 12、宮村実晴 9、猪俣公宏、斉藤満、西田保、以上7、

大桑哲男、野々宮徹、守能信次、以上6、池上久子、

石垣尚男、加賀秀雄、菊池秀夫、木村吉治、永田靖章、湯浅影元、以上5、市野聖治、伊藤宏（静岡大）、石田浩司、梅村義久、春日規克、高橋義雄、藤井勝紀、山本章、小林培男、以上4

平成17年4月から平成19年3月まで池上康男氏が日本体育学会理事に就任し、寺田邦昭氏、山本裕二氏に東海体育学会からの代議員としてご活躍いただきます。東海体育学会の意見を日本体育学会に反映させていただきいっそうの学会繁栄を期待したいと思います。

2. 東海体育学会役員選挙

平成17年度は東海体育学会の役員選挙が開催されます。東海体育学会会則（役員選挙：第29条～第33条）に従い、東海体育学会会長および理事候補者の選挙を実施します。郵送投票と総会時の投票による2段階選出法が適用され、最終的には、今年10月30日（日）に愛知大学車道校舎で開催される学会大会において会長お

よび理事が決定されます。今回は郵送投票による要項が会報に同封されています。投票要項に従い、7月29日（金）までにご投票ください。昨年行いました代議員選挙では低い投票率となってしまうましたが、今回はぜひ会員のご協力を賜りたくお願いいたします。

3. 会員の消息（平成17年3月31日現在）

※個人情報保護のためホームページ上では住所・所属の掲載はしてありません。配布会報№

※新入会員

大塩 正則

78には掲載してありますのでご参照ください。

小栗 和雄

小沢 英二
加藤 貴英
塩見 哲大
杉山 正高
鈴木智香子
高邑 和樹
滝 剛志

※転入会員

種田 行男
井上 一生
神野 稔
木越 晴信

※所属・住所変更

有川 一
伊藤 友記
祝原 豊
大矢 隆二
大勝志津穂
梶岡多恵子
佐藤 祐造
塩原 克幸
鈴木 官
鈴木 健司
鈴木 裕子

※転出会員

唐津 優江
久保 和之
近藤 春香

※退 会

江崎 浩央
高橋 春子
徳永 容美子
豊島 進太郎

田中 望
中本 光彦
沼田 晶弘
松尾 宣隆
三井 孝
山本 忠幸
吉田純一郎

鍋谷 照
野田 達也
松井 健
溝口 紀子

寺島 徹
西井 匠
野田 昌宏
宮村 実晴
村山 勝
山本 周史
横井 康博
横澤 仁美
渡邊 功
渡辺 香

田中 千晶
杉浦加枝子

西森 珠貴
早川 貢
水谷 好孝

4. 日本体育学会への登録・訂正等

日本体育学会会員の方は名簿に訂正箇所がありましたら、学会員名簿や体育学研究の折り込みのはがきを利用して、日本体育学会に訂正を

依頼して頂きたいいたします。

東海体育学会のみの会員の方は東海体育学会事務局にお知らせください。

5. 学会費の納入

日本体育学会会員の方は、預金口座振替による自動振込をご利用頂きたいとお願いいたします。自動振込の申請用紙が必要な方は東海体育学会

事務局にご請求ください。東海体育学会のみの会員の方は東海体育学会の郵便振替口座に年会費 3、500 円を納入ください。

6. 東海体育学会事務局

東海体育学会に対するご意見、ご希望等ありましたらご連絡ください。

〒466-8673 名古屋市昭和区山里町 18
南山大学体育学教室内 東海体育学会事務局
TEL 052-832-3110 (603)

FAX 052-832-3703

E-mail: tspe@htc.nagoya-u.ac.jp

東海体育学会

郵便振替口座番号：00870-8-41336

編集後記

この会報を編集しているさなか、去る 4 月 19 日に前学会会長 加賀秀雄先生の訃報が飛込んできました。学会の重鎮でありながら、そのお人柄の良さに多くの会員が魅力を感じていたことと思います。学会発展のためにご尽力くださいました先生に、心よりご冥福をお祈りいたします。

さて、従来会報に掲載していました理事会報告は、今年度より学術誌「東海保健体育科学」に掲載することになりました。これを受けまして、理事会報告を早めに会員の皆様に公開するために 4 月に会報を発行していましたがその必要がなくなり、また内容を充実させるために発行を 6 月に変更させていただくことになりました。

本会報 78 号は、研究室訪問を復活させました。また、昨年開催されましたアテネオ

リンピックに東海地区の先生方が多数参加され、ご活躍になられました。そこで、お忙しい中、数名の先生方をお願いをして回想録をご執筆いただきました。それぞれのお立場から、感動的なお話をお書きいただきました。私たち体育指導者にとって貴重な情報が満載されています。

海外研修・研究室訪問・オリンピック回想録にご執筆いただきました先生方に、この場をお借りしお礼を申し上げます。

次号以降も会員の皆様の様々な情報を掲載していきたいと計画していますので、広報委員会へ情報をご提供ください。

最後に、本会報は株式会社ミニミニのご支援をいただきまして発行することができました。この場をお借りし、お礼申し上げます。

広報委員会委員長 花井忠征

東海体育学会会報 No. 78

発行日	2005 年 6 月 1 日	発行	東海体育学会	編集	広報委員会
事務局	〒466-8673 名古屋市昭和区山里町 18				
	南山大学 体育学教室内 東海体育学会事務局				
	TEL 052-832-3110 (603)	FAX	052-832-3703		
E-mail	tspe@htc.nagoya-u.ac.jp				
ホームページ	http://www.soc.nii.ac.jp/tspe/				

次世代へ
知性と優しさのある暮らし



トータルサポートシステム

多様化するライフステージをトータルにサポート致します。

新商品物件でお値打ち入居実現

お馴染みの敷金・礼金0物件に加え、仲介手数料を家賃の52.5%です。単身者の方には家具・電化製品付きのお部屋をご用意するなど今までにない新商品物件が誕生しました。

全国に広がるミニミニネットワーク

賃貸ニーズを的確にとらえ、全国に直営500店舗、FC500店舗を目指します。広範なネットワークと豊富な物件でご希望のお部屋をお探し致します。

ウィークリー・マンスリーで快適生活

ミニミニグループの賃貸物件から厳選したお部屋をウィークリー・マンスリーマンションとしてご利用いたしました。ビジネスホテルに比べ、経済的でプライバシーが守られたお部屋で快適な生活をお楽しみください。

体育会学生
必見!

体育会 学生専用 体育会合同就職セミナー

セミナー参加のお申し込みはインターネットもしくはFAXにて専用申込書をお取り寄せ下さい。

ミニミニスポーツ店舗ホームページ
<http://minimini.jp/sports/>
ミニミニスポーツ事業部 FAX (052) 973-1940

2004年、リクルートスポーツの「スポーツ就職セミナー」に参加が可能です。

名古屋会場

■ 9月13日(火) ■ 10月3日(月)
会場/中小企業センター

会場/地下鉄有線通(東山駅)バス乗場徒歩5分
会場/有線通(東山駅)バス乗場徒歩5分
会場/有線通(東山駅)バス乗場徒歩5分
会場/有線通(東山駅)バス乗場徒歩5分
会場/有線通(東山駅)バス乗場徒歩5分
会場/有線通(東山駅)バス乗場徒歩5分
会場/有線通(東山駅)バス乗場徒歩5分
会場/有線通(東山駅)バス乗場徒歩5分



全国書籍出版(株) スポーツ事業部

TEL (052) 959-2020 FAX (052) 973-1940

E-mail spochan@minimini.jp

(株)ミニミニ mini mini 支援部

TEL (052) 973-3288 FAX (052) 973-1940

E-mail shienbu@minimini.jp

お部屋探しの
強い味方

mini mini

お気軽にお問い合わせください! 携帯サイトからもダイレクト入力でご利用いただけます

0120-19-3232



お部屋探しの強い味方

<http://minimini.jp>

スポーツチャンWebサイト

<http://minimini.jp/sports/>

ミニミニの紹介手数料は、

家賃の
52.5%
です。

FC店舗・提携店・加盟店・提携店
※手数料は別掲。